もったいない・おかげさま・ほどほどに、が環境と人間を育てる

M・O・H通信

M·O·H communication

33号
2011
Autumn

特集：未来につなぐ
「社会・地域・技術・人」

M・O・H通信 33号 ― 特集：未来につなぐ「社会・地域・技術・人」 2011 Autumn

art gallery

Vol.33
2011 Autumn

佐々木 洋一
（ささき よういち）
滋賀県長浜市在住

「醒ヶ井地蔵川」
水彩画　横370mm×縦270mm
梅花藻が清流の中で小さく白い花をつける地蔵川は中仙道沿いにあり、伝統を感じさせる民家が川沿いに軒を連ねています。盛夏の頃は観光客で賑わいをみます。

「M·O·H」のマーク=牛

牛は環境の象徴ともいえます。牛糞はメタンガスになり、肥料にもなります。大地を作り、食物を育て、生物を養います。私たちは命の源ともいえる、牛を「MOH」のマークとし、循環型社会の象徴とします。

★M·O·H通信の役割★

持続可能で豊かな循環型社会を築く社会人の意識を向上するためMOH通信は情報を発信し交流を続けます

M →**循環** もったいない　他の生命を奪って得たものを使わせて頂く

O →**共生** おかげさま　人は一人では生きられない、環境によって生かされている

H →**抑制** ほどほどに　欲はほどほどに、良き環境を作り上げるために

contents
目 次

特集「未来につなぐ」— 社会・地域・技術・人

M・O・Hインタビュー　那須より愛を込めて
幸せ度を上げながら、
エネルギー消費量を減らす ライフスタイルへ　藤村 靖之 …… 5

M・O・H討論会　本気で変革しちゃいましょう
未来につなぐために自分らしい暮らしを見つける　…… 16

寄稿　～幸せな社会を未来に手渡すために、今、何が必要か？～
Eco-Progressから Eco-Evolutionへ　花田 眞理子 …… 27

M・O・H対談　地域のつながり再構築
日本再生のカギは「共」の力と「自治力」
岡田 知弘 & 内藤 正明 ……33

M・O・Hレポート　豊田市里山くらし体験館「すげの里」
自給自足の里山の暮らしを今に　ワダ マキ …… 42

M・O・Hレポート　アーティストの挑戦
印刷Expo vol.1「 登校日」　…… 51

漫画　山暮らし子育て日記
「東京へ行く !! の巻」オノ ミユキ …… 53

愛する風景
わかれ　畑　裕子 …… 55

商家の家訓の話　第18回
山中兵右衛門家の承継と奉公人　末永 國紀 …… 57

里のお話
アザミの山　三山 元暎 ……59

本の紹介　…… 60

嘉田知事と語る
「滋賀の未来戦略と人材育成・近江環人」…… 61

イベント紹介　…… 64

通信概要　…… 69

読者の声　…… 70

表紙写真
辻村耕司
ソラノネ食堂(高島市)で行われた結婚式のあと、参列者の家族が子どもたちと遊ぶ。高い空と風がはこぶ森の匂い。

未来につなぐ
―「社会・地域・技術・人」

秋の陽射しの中で横たわる。この光景が当たり前でなくなる場所が日本で生まれるとは思いもしなかった。子どもたちが、そして、その先の世代へこの世界を届けたい

経済至上主義を超えられるか

森　建司

兼ねてから危険視されていた「経済至上主義」の行き詰まり感が、ここへきて原子力発電の大事故から一気に表面化する様子だ。今人類にとって持続可能社会を実現していくためには何をすべきか、この議論が加速され、世界的な問題として大きくクローズアップされることは間違いない。

現代の歴史は、過去の産業革命から始まった大量生産を基軸とした「経済至上主義」への期待に集約され、経済に恵まれることが人々に至福をもたらす唯一の手段であるとの思想が全体を占めてきた。もちろんそれに対して否定的な考え方の人たちも存在していただろうが、その人数は極めて少数派で、社会全体からすると異端者扱いになっていたのではないか。

今後、新社会への論議が一段と激しくなり、早晩一つの改革へ向かって進むことになるのは間違いない。問題は社会の在り方を変えるうえで、「経済至上主義思想」を温存したまま、その保守主義に沿った、つまり経済至上主義に凝り固まった行動範囲（思想範囲）で、当面の対策に終始するのか。あるいは「人間の幸せとは何か」の原点に帰り、金儲け、経済の豊かさだけが人々にと幸せをもたらすのか、を真剣に考えそのうえで「経済至上主義思想」を否定し、革命的変化の方向に行くのか。そのどちらをとるかによって正に人類の将来がかかってくるだろう。

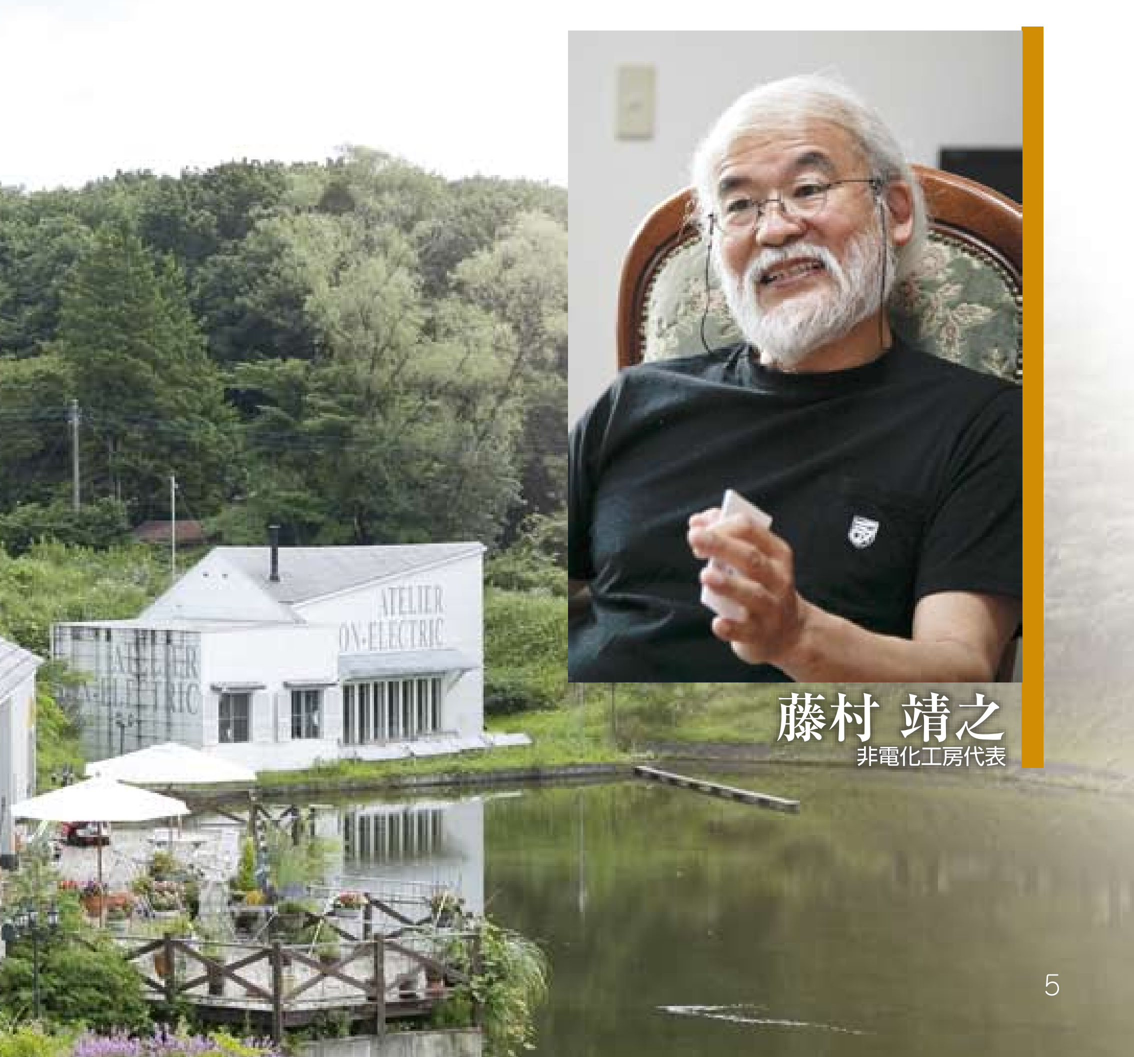
現代社会のリーダーたちは、行政も経済界も「経済至上主義」においては、保守主義者である。またその思想によって統括されている各方面の指導者たちも、この革命的な社会変革の実現には、強力な抵抗勢力になるのは間違いない。また、市民と言えども「経済至上主義」の恩恵を被って永年の過去があり現在もそれが続いている。

しかし、人類に繁栄と幸福をもたらした「経済至上主義」は内部に自己矛盾を抱えていたのだ。無限の経済成長が前提となるこの主義の行き着く先は、さまざまな自己矛盾の拡大によって存在が不可能になることが今や自明のことだ。

いまこそ、その自己矛盾がわれわれの周辺にいっぱいに出現している。この問題は行政とか企業活動のリーダー達に任せておいて進展するものではない。正に自立した市民の思想が前面に出て創造していくものと考える。

M･O･H インタビュー
〈 未来につなぐ「社会・地域・技術・人」—①〉

幸せ度を上げながら、エネルギー消費量を減らすライフスタイルへ



藤村 靖之
非電化工房代表

「電気を使わずに、ホドホドに快適な〝家電製品〟を開発・商品化」している、栃木県・那須町の非電化工房。新しいライフスタイルの可能性を秘めた非電化生活を提唱している代表の藤村靖之さんは、福島の原発事故を受けて、大人の力で子供たちを被曝から守る住民プロジェクトを立ち上げました。その取り組みと思いについて、インタビューしました。

■非電化工房／栃木県那須郡那須町
■2011年7月28日
■聞き手／辻村琴美

麗しの非電化ライフ。那須高原に現れた電気を使わない暮らしのテーマパーク。美しい。池には鯉が泳ぎ、庭は奥様の愛情いっぱい綺麗な花が咲く、中央は事務所兼自宅、右手にはアトリエがある。心が落ち着く。

グローバリズムから ローカリズムへの転換を

―― 福島第一原発事故の影響で、とりわけ夏の電力不足が懸念されています。そのなかで、非電化工房の「電気を不必要に使わず、愉しく生きる」というライフスタイルが、注目されていますね。

藤村　一時は問い合わせが殺到して、電話の対応だけで一日が終わったこともありました。私は発明家なので、あれが正しいとか正しくないとか発言する立場ではありません。電化製品を手に入れることが豊かさの象徴のようになった現代社会において、別の選択肢もありますよ、という提案をするだけです。非電化というのは、貧しい昔に戻るのではなく、新しい豊かさを実現する提案なのですよ。

―― そもそも、「非電化」にはどういった思いが込められているんですか?

藤村　学生のころは、科学が人や世の中を幸せにすると思い込んでいたけれど、現代社会において科学は一部の人の欲望を膨らます経済の道具になってしまっていることに気がつきました。たとえば、世界で最も貧しいと言われるジンバブエの地方都市ですら外国人が入り込んで経済成長を促しているのですが、それらの外国人の心の中は100%が欲望で、だれもジンバブエの人たちの幸せを願っていない。どんなに優れた電子技術を持ち込んでも、それではその国の技術には永久にならないだろうし、環境や経済や安全の持続性がないうえに、利用されるだけで自立はできない。科学者や技術者が悪いわけじゃないけど、そうした世の中に加担していく社会システムそのものがよくないと思ったんですね。それで、世紀の変わり目となる2000年に、もう一度自分の役割を定義しなおそうと考えて、最終的に経済成長以外の新しい選択肢として「愉しい非電化」を提唱し始めたんです。

藤村先生は今や時の人。非電化工房を紹介する記事はあふれるように

―― トイレに入ったら自動で便座が開くとか、カーテンの開閉がリモコンでできるとか、50年前に夢見て描いていたユートピアの世界を寸分たがわず実現できたけど、「なんかおかしいな」と感じている人も多いと思います。だから余計に、今回の原発事故で国民全体が「節電」を意識して生活するようになったのかもしれません。

藤村　日本人は、今回の原発事故によってエネルギーに依存しすぎる社会の危うさを痛感したと思います。そして、みんなで節電しようという行為は素晴らしいことです。その一方で、僕が怖いと思うのは、エネルギーに依存しすぎない社会を目指そうという大きな決意が、目先の「節電ブーム」にすりかえ

られてしまうことです。

―― 具体的にはどういうことでしょう?

藤村　中部地方のある女性新聞記者から聞いたんだけど、3・11以降、エアコンの売り上げが前年同月比の4倍なんだそうです。大勢の人が省エネ型エアコンに買い換えたのだそうです。まだ使える古いエアコンを捨てて買いなおしてでも節電に協力しようとする気持ちは尊いのですが、「また罠にはまってるじゃないですか」と、その女性記者は怒っていましたね。家電製品の省エネ型の冷蔵庫やテレビに買い換えたけど、エコポイントがたくさん付くという理由で大型のものを購入し、むしろ消費電力は上がってしまったことがありましたね。「エコロジーのエコではなくて、エコノミーのエコ」と、誰もがわかってはいましたけどね。エコポイントは笑い話で済ましてもいいのでしょうが、3・11を笑い話にはしたくないですね。

―― 電力不足なら省エネ家電を買う、原発がダメなら自然エネルギーにというマインドセットですね。

藤村　原発の代わりに風力発電や太陽光発電に置き換えれば良いという議論が流行っているけど、これは危険な議論だと思いますよ。震災前、日本はエネルギーが増えるのがいけないんじゃなくて、炭酸ガスが増えるのがいけないんだという、不思議な議論のもとに、オール電化住宅や電気自動車化を進めていった。オール電化住宅と電気自動車化が100%進むと、原発換算で27基分の新たな電力需要が生じるのだけど、その流れのまま、原発をやめて自然エネルギーにというのは明らかに無理ですよね。そこを間違えないようにしたい。そうしないと、また罠にはまってしまう。トータルのエネルギー消費量を減らし、その中に占める電気の割合を減らす。そうして減らした電気を自然エネルギーでというなら可能性は大きいですよね。

―― それほどのエネルギーを消費せずに、私たちが幸せになるにはどうしたらいいのでしょうか。

藤村　僕は、幸せ度を上げながら、トータルのエネルギー消費量を減らす方向に持っていく社会システム、そういうライフスタイルを求めていくべきだと思う。重要なのは、自立型で持続型であること。国が大きく成長しているときには地方にも仕事が生まれただろうけど、いまは見かけ上は回っているけど、実は大きな借金を抱える形で傷を広げながらやっているだけでしょう。だから、経済も地域循環型に切り替えていかざるを得ない。大切なのはGDPの大きさではなくて、環境と雇用を地域レベルで両立することでしょうね。このことは、20世紀の終わりにみんなで総括したことでしたよね。エネルギーについても、環境と安全が守られ、かつ地域に雇用を生み出すという意味のローカル化が求められるのではないでしょうか。地熱が豊富な地域は地熱を、川の落差が大きい地域は小水力発電を、森林資源が豊富な地域はバイオマスを……というように、エネルギーを多様化・ローカル化し、地域に雇用が生まれる形がよさそうです。中国で作った太陽光発電装置を使えばいいというわけではないと思いますよ。

❶ 工房にはお弟子さんが作業中。非電化工房のDNAを引き継ぐ。 ❷ 昔の農機具を収集。手前は縄を綯う機械 ❸ アトリエ ❹ ソーラークッカーの試作品 ❺ 手巻きラジオ㊨スローカフェ㊧ ❻ 手動で簡単に玄米ができる「非電化籾摺機」 ❼ アトリエには試作段階の製品が数多く

❶

❸

❹

❷

❼

❺

❻

低濃度放射能汚染から子どもを守る那須の住民プロジェクト立ち上げ

――那須町にある非電化工房は、福島の第一原発から95キロ離れているとのこと。放射能対策に取り組む住民プロジェクトが始まったとお聞きしました。先生が発起人ですか？

藤村　放射線量の数値は日々、上がり続けていますね。何もしないでも子どもの安全を守れるというレベルはすでに超しました。子を持つ親の多くは不安を募らせています。ただし、この程度の低濃度汚染であれば、大人がやることをしっかりやれば、子どもの安全を守れることも確かだと僕は思っています。大切なことは「安全か、危険か」と揺れ動くことではなく、「どうすれば大人の力で子どもの安全を守れるか」ということだと思います。そこで、地域のみなさんに「大人が怯えるのはやめよう、迷うのはやめよう」と呼びかけてみたら、みんな動いた。4月9日に緊急講演会をやって団結した。それで、放射能対策住民運動「那須を希望の砦に」プロジェクトが発足したわけです。

――「希望の砦」の意味とは？

藤村　福島県に隣接し、原発から95キロの那須で冷静な対応をして大人の力で子どもの安全を守ることができたら、200キロ、300キロ離れた地域の人たちも希望が湧くかもしれないと考えて、すこし大袈裟なのですが「那須を希望の砦に」という名前にしました。

――どのようなことに取り組んでいるのですか？

藤村　まず、住民有志が基金を集めて放射線測定器を購入し、グループに分かれて、地域内の空気や水や野菜や牧草の放射能汚染度をたくさんの地点で測定します。確かな根拠に基づいて、安心できる汚染度レベルを自分たちで判断できるように、勉強会を開いています。そして安心できるレベルまで被曝量を小さくするための対策を住民が力を合わせて行います。

福島原発事故と放射線被爆対策

――勉強会用のテキストも作られたとお聞きしましたが？

藤村　「放射線被曝は危険だ！」という本はたくさん有るのですが、子どものトータルの被曝量を母親が推測する資料も、具体的な対策方法を書いた本も見当たらなかったから、仕方ないので僕が作りました。『福島原発事故と放射線被曝対策』というテキストです。ひとり1000円で購入してもらって、そのうち700円が住民プロジェクトの運営費になるんです。それがいま、3000部売れていますから、210万円の活動費になっている。このプロジェクトは栃木県の南部や福島県などにもどんどん広がっているので、いいことだと思いますね。

――この先、どのような未来予想図を描いておられますか？

藤村　原発事故を僕たちは起こしてし

まったけれど5年後、10年後に子どもの放射線被害者をこの町から一人たりとも出さないっていうこと。長い闘いだから、息切れしないようにしたいですね。だから、「仲良く・愉しく・科学的に」を合言葉にして活動しています。対立・深刻・非科学では長くはもたないと思うからです。

――先生のような方にリードしてもらって、正しい知識を得ることの大切さに気づくことも重要ですね。

藤村　僕は原発には反対の立場で原発や放射線被曝のことを勉強してきたし、放射線量測定装置も3・11以前から個人で所有して測定していたのですが、そういう変わり者がたまたま原発から95キロの所に住んでいたわけですから、こういう役割が生じるのは当然かもしれませんね。正しい知識を学んで愉しく子どもの安全を守りたいですね。いいことを愉しくやることが知性だと思う。知性が集団で発揮されるのが文化。その知性と文化が、社会を愉しい幸せなものにコントロールする大きな力になるべきだと思うんですよね。でも、残念ながら日本は高度成長経済の代償として知性を低くしてしまった。少し前のことだけど、塩ビ系のラップがダイオキシンを発生させると問題になったとき、スウェーデンでは消費者は買うのをやめた。店はまだ在庫があるのに売るのをやめた。メーカーは作るのをやめた。社会問題にも新聞記事にもならず、淡々とスマートに収束していった。知性が高い国ですね。一方、日本では何が起こったかというと、消費者が一生懸命回収して、送料を負担してまでメーカーに送って訴えた。でもメーカーは、法律で禁止されていないからと言ってやめなかった。残念ですね。

「人とのつながり」や「ライフスタイル」を生み出す非電化

――社会システムは大きすぎて、それを変えることは一人の発明家や起業家の手に余るように思いますが、いい方法はありますか?

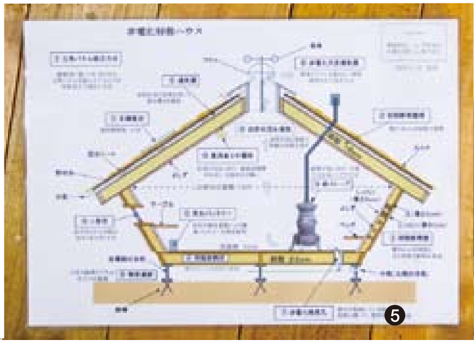
藤村　「ミッシングリンクを探す」という方法は有効だと思いますよ。世の中がうまくいかなくて、みんな〝なんか変だな〟と思っているとき、その中の失われた環をひとつ見つけるだけで、一本の鎖につながることがある。時には、ビジネスモデルを考えることで、不足しているものが見つかることもあるんです。たとえば、非電化工房の「珈琲焙煎器」がささやかな例です。これは自分でコーヒー豆を煎るための道具で、コーヒー一杯ができるまでになんと25分間もかかる。それなのに、8500台も売れたんですが、決して売れるだろうと思って作ったわけじゃないんです。

非電化珈琲焙煎器。カラカラという音と香ばしい香りとゆったりした時間。無農薬のコーヒー豆。

❶非電化ストローベイル（土と藁）ハウス　❷稲わらがつまった壁が断熱効果を発揮　❸ムーミンハウス。フィンランドより輸入。かわいい

――どういった経緯があったのですか？

藤村　ブラジルで唯一、無農薬のコーヒー豆を作っているカルロスさんという人がいたのだけど、農園から出荷して日本の消費者に届くまでに、商社や焙煎業者など流通が7段階もあるために、日本の消費者は出荷価格の30～40倍で買っているにも関わらず、カルロスさんは「利益が出ない」と嘆いていた。そこで、何とかしてあげたいと思って、カルロスさんから僕の友人の中村さんを通して消費者へという、流通を2段階に縮める方法を考えた。生豆なら10年でもアルカリ性のままだから、1年分まとめて買うことができる。そうすると、カルロスさんからは今までの3倍の値で買い上げることができるし、日本の消費者には半額で提供できるでしょう。無農薬だから人には影響は出ないし、持続的に農業ができるし、いいこと尽くめ。で、そこで必要になるのが、自分の家で愉しく上手にコーヒー豆を煎る珈琲焙煎器だったというわけですヒー豆を煎る珈琲焙煎器だったというわけです。



❹ 非電化籾殻ハウス内部。くつろげる　❺ 空気は非電化換気孔を通り上部に抜ける　❻ 断熱床、二重窓、太陽電池、通気層、ファン、風車、ススキ、しっくい、土、薪ストーブ、直流省エネ電球。ヒントがいっぱいの図解

— ミッシングリンクが見つからない場合は、どうしたらいいんでしょうか。

藤村 見つからなければ、やらないまで。見つかったことだけ、エイッてやる。でも、実はこういうことって世の中にたくさんあるんですね。そういう目で探せばたくさん見つかるはずですよ。

地域の"文化活動"でムーブメントを起こそう!

— 藤村先生が那須に来られて4年。ほかにも、地域でいろいろな仕掛けをされてきましたね。去年は「アースデイ那須」の呼びかけ人になって、イベントを成功させました。そういった積み重ねで、地域の方々の意識も以前とは変わってきているのではないでしょうか?

藤村 アースデイは、「ゆるやかに、おおらかに、優しいつながりをつくって、地球のことを考えましょう」という、世界各国で取り組まれている世界最大の環境フェスティバル。それを去年、那須で開催したことには理由がありました。この街には本当に美しい自然があって、

夢中になるっていいねえ（藤村氏）

潤いのある文化がある。でも、欠けているものも2つあった。それは、人と人のつながりが全くなくて、バラバラで寂しそうだったこと。もうひとつは、若い人に新しい仕事が生まれなかったこと。だから、僕はみんながもっと仲良くなれるようにと、アースデイをオーガナイズしたわけだけど、終了後には「アースデイから那須は変わった」と外からも言われるくらい、人とのつながりが活発になりました。「勇気が出た」って涙ぐんだ青年も5人いました。たかがアースデイというお祭りで、若者5人涙ぐませられたら出来すぎでしょう（笑）。

―― 素晴らしいですね（笑）。月並みな質問ですが、先生の夢はなんですか？

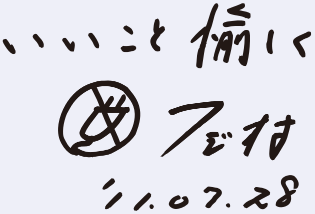
藤村　僕は発明家だから、夢に向かって生きているわけじゃなくて、夢中で生きているだけ（笑）。でも、夢中になれることがいつもあって、それに没頭できるということは、幸せだと思います。

―― では、いま夢中になっていることは何ですか？

藤村　大人の力で放射線被曝から子どもを守ることが一つ目。2つ目は地方で仕事を生み出すこと。ただ仕事を生み出すだけではなくて、いいことで愉しく稼げるような仕事を生み出すこと。どうしたらいいかと考えて「月3万円ビジネス」というセオリーを3年ほど前に思いつきました。アッチコッチでしゃべっていたら、少し流行り言葉になりはじめたので、もうちょっと流行らせてみたくなって、『月3万円ビジネス――非電化・ローカル化・分かち合いで愉しく稼ぐ方法』（晶文社）という本を書いてみました。読んでみてくださいね。

―― ありがとうございました。

テクテクノロジー革命㊤
月3万円ビジネス（中）
愉しい非電化㊦



●ふじむら やすゆき＝満洲生まれ。大阪大学大学院基礎工学研究科物理系専攻博士課程卒、工学博士。㈱コマツ熱工学研究室長を経て、㈱カンキョーを設立。2000年に、非電化工房を立ち上げる。2008年より日本大学教授。発明起業家として、科学技術庁長官賞、発明功労賞、94年ベンチャーオブザイヤーなど受賞多数。著書に『さあ、発明家の出番です！』（風媒社）、『愉しい非電化』（洋泉社）、『月3万円ビジネス』（晶文社）、『テクテクノロジー革命』（共著、大月書店）などがある。

●非電化工房／〒329-3222 栃木県那須町寺子丙2783-22
☎0287-77-3199
http://www.hidenka.net
見学会実施中「非電化工房見学会」で検索

M·O·H討論会

未来につなぐために自分らしい暮らしを見つける

〈未来につなぐ「社会・地域・技術・人」―②〉

私たちが決して忘れてはいけない大きな出来事がある。広島・長崎の原爆投下と東日本東北大震災（3.11）。生命に直結する大惨事が、リアルタイムで起こってしまった。本誌には32号に滋賀県嘉田由紀子知事から『正常な安全感覚とは？』と題するメッセージが届いた。後の“卒原発”につながる、エネルギーの使い方と、“不易の対応と有事の対応”地域密着型の災害対応策の必要性が訴えられ波紋を呼ぶ。33号は、テーマを『未来につなぐ』とした。が、編集者にはつなぐものへの迷いがあった。迎えた執筆者懇談会（7月15日）。揺れる編集者の境地を、執筆者たちは鋭く追求する。「M・O・H通信はどう捉えるの？」。今、改めて執筆者によるM・O・H通信のための読者に投げかける意見交換が繰り広げられる。

■参加者／

内藤 正明　循環共生型社会システム研究所所長
今関 信子　児童文学作家
仁連 孝昭　滋賀県立大学副学長、環境共生システム研究センター長
森 孝之　アイトワ代表、ライフスタイルコンサルタント
玉垣 勝　NPO法人麻生里山センター理事長
井上 昌幸　滋賀県異業種交流連合会会長
徳永 拓美　日本画家

■日時／7月30日（土）
■場所／山科　安兵衛

内藤先生の話題提供

震災が問いかける社会変革

《技術と産業の方向》

震災に関して、幅広い議論が起こっている。それは大きく言えば、一つはモノの面。まちをどう作るか考え直さなければならない。少なくとも近代の街づくりは快適で便利な〝技術〟で支えようとした。日本の家は規格化し大量生産したため、同じ構造になり、安全安心も技術に依存する自然と無関係な暮らしになった。本来の町は歴史や風土に依って人と自然が時間をかけて織り成されるもので、安全安心は人の絆で支えていた。ようやく世間の議論がここまで気づいてくれた。技術と産業は、今までは大規模先端的でどんどん進歩していったが、本来的には身の丈にあった、市民による市民のものでないと再建が困難だ。非電化工房がお手本になるのだろう。今までは巨大資本が産業をおこし、できるだけ経済効率を上げるための産業運営がされてきた。大量生産するということは短期的には儲かる方法だけど、今後は、市民資本による適正規模のものに変えていく必要がある。

《心の面》

一方では心の面に関する議論。原子力の議論で一番気になったのは、元東電副社長で日本のエネルギー政策のもと締めの言葉だ。「自然エネルギーなんてロマンだ、そんなこと言うやつは社会党へ行け」というくらい。結果的に3.11による津波の原発事故が起こっても、彼が心配したのは金融市場のことで株主のことだった。国民のことが出てこないのは、産業の発展こそが国の発展であるという定義が明確にあるからでしょう。産業の発展が日本の発展だということしか彼の頭のなかにない。戦前は軍隊のため、戦後は企業戦士として国民は教育されてきた構図が浮かび上がる。教育のあり方は人を何に向けて育てようとしているのか。国とは何か、に戻ってくる。軍隊が強ければいいというのが戦前、戦後は産業を強くすれば国は栄えるとして、それに奉仕するのが日本国民の役目だとしてきた。そのための人材を養成してきた。決して市民の幸せが目的になったことはない。

《人の倫理観の転換》

今回世界中が反応してくれ、心に残ったのは日本人の行動。〝相手のことを考えて行動できる〟ということが絶賛された。中国や韓国からも。軍事力や経済力では得られなかった世界からの尊敬を『倫理力』で得た。関東大震災のあとにも、フランスの駐日大使が、パリでのスピーチで「日本人は貧しいが高貴である。私がどうしても滅びて欲しくない一つの民族は日本人だ」と話している。

《人類持続の要件》

人類持続可能の要件は、先端技術でも新たな経済の仕組みでもなく、『他者の命に思いをはせる心』ではないか。コモンズの悲劇（人よりも利益を得ようとする行動が、共有の資源を枯渇させるという比喩）を起こしてはならない。自分のためではないことに思いを馳せることができるか、地球（人間）の倫理から考えてもそこに尽きる。人間存在の本質の議論になるけど、今回の震災の市民行動に対して世界が言ってくれたことを真にうけるなら、日本人ならモデルになれるかもしれない。

さあ、討論会のはじまりです

討論会

歴史が物語る日本の過去

井上　《心の面》について戦前の軍事国家では国民は国の戦士、戦後の産業発展では国民は企業戦士、国の為、企業の為、家族の為に頑張ってきたから現在がある。但し現在は大きな矛盾を抱えている。歴史的にみると、明治維新があった。明治維新は富国強兵に走ってしまった。西郷隆盛のような日本人の心を持った人たちがそれについていけなくなった。これが日本にとっての大きな分岐点で、結局日本人の精神を捨てて西洋文化を取り入れたというのが、1点目の大きな矛盾だと思う。それともうひとつは、1951年にサンフランシスコ条約が結ばれて、日本はこのとき独立した。このときから憲法が変えられたのに一切しなかった。そして吉田茂首相が経済拡大に走った。根本的にここで経済を優先して日本人の本来のあるべき姿を放棄した。そういう面では、企業戦士が戦後の生き様であり、憲法をそのままにして経済に走り、朝鮮戦争があったおかげでアメリカが日本を占領から開放するという結果になった。日本を共産圏の防波堤にしなきゃいけないから、戦後7年目にして独立させたという事実がある。この2つの大きな日本の間違いが見てとれる。

デマインドサイドの転換期

仁連　《エネルギー源の選択》エネルギーについてひとつ大事なことは、化石燃料の時代に入って以降、安いエネルギーをいくらでも使えるようになったということ。エネルギーをどんどん使いながら人間が便利さに安住するため、資源を掘り出して使い続けるという、エネルギーが無尽蔵にあるという前提の文化だ。

石油がなくなってくることが見え出すと、次を考えないといけない。政治的な意味もあると思うが、先進国は原子力開発の優位性を保持するために原子力発電を進めてきた。原子力は無尽蔵のエネルギー源であると紹介された。これからいくらでもエネルギー使ってもいいよ、そういう時代が保障されていますよ、というふうに説明されてきたが、3・11はそれが平坦な道ではないことを示した。エネルギーがいくらでもあるということは、サプライサイドの問題は専門家がやれば解決できる。サプライサイドの問題さえ解決すれば我々の豊かな暮らしは保障されるという考えがひろまった。今考えなければいけないのは、デマンドサイドだ。消費者は企業が用意したものを、ただ与えられることに甘んじるだけではなくて、エネルギーに依存しない非電化製品など素晴らしいものを自分たちで育てていこうという転換が必要。地産池消もそう。デマンドサイドのことを自分たち自身に取り戻すという転換期が来た。

今関　3・11が起こる少し前に、団地でオール電化がはやりだした。「うちはオール電化にします」と誇らしげに言う人がいた。社会のなかに電気を使う暮らしがスマートで、それができる人たちは暮らしぶりが良くて、優れている人なんじゃないかと言う風潮があり、それがいつの間にか刷り込まれたのではないかと思う。これはとても危険なことだと直感した。エネルギーだって危険分散しなきゃいけないのに。社会風潮にのまれて一方的にコントロールされてしまう危険を自覚しなければと思う。

福井県美浜発電所

仁連　エネルギーの選択を自分たちで考え決めることが大事。原子力利用のためにはウランが必要。将来的には核廃棄物を貯留する場所が必要だけれども、その場所はたぶん日本じゃない。で、どこかの国ってことになると、その国の政治的安定が必ず求められる。そうでない場合には日本の軍事力が求められるかもしれない。石油や天然ガスの利用のためにも、それらが他国から安定して供給されなければならない。エネルギー供給国の政治、経済、社会など自分たちの責任が取れる範囲を超えたものに私たちの生活を依存せざるを得ない。

地域の暮らしを基本に

今関　私たちは琵琶湖のある滋賀県に住んでいるから、いろいろな生命と一緒に生きていかなければいけないということが発信できる。エネルギー問題で私たちと違う立場の人たちの問題をどう考えるかを含めて、被災された方の痛みを一緒に痛むことが、できるかできないかということ。日本は経済国家として第2国3国に落ちていきますよという脅しがかかってくるとみんな「やっぱり原子力です」ってあわてますよね。ひとつの会社と国が大きな力で日本全体の

電力をコントロールしていることに今回のことで目覚めた。地域の特性を生かした発電をすることで、地域が生きていける方法があるはず。それを勉強して、ひとつの会社に頼らずに、自分たちの地域の暮らしぶりを大切にする考えを持っていけるかが大事。

仁連　電力会社から供給される電気を何の戸惑いもなく使うということじゃなくて、できるだけエネルギーを使わない生活をしなきゃいけない。昔は使わなかったわけだから。エネルギーはいろんな意味で安価だという幻想の上にたってエネルギー多消費社会が成り立っていた。

自分の暮らしは選択できる

今関　わたしは、今、アイトワの森さんにほれ込んでいる。アイトワの暮らしが素敵だと思えるんです。太陽光発電があって、畑の仕事など、自然の恵みの内に生きている。この太陽光発電は関西で一号機らしく、新聞記者がこれはいくらくらい電気代がもうかるんですか、との質問に森さんは「うちにはこれをつける贅沢はしたい。でも奥さんは毛皮を着る贅沢はしない」というすてきな言い方をされる。そこには選択というか、自分たちの暮らしはこうすると言う夫婦の生き様がある。

森　そう言っていただくとてれくさいのですが、商社にいたおかげ。さまざまな資料や情報を見ると、このままではいずれ工業時代は破綻する、と見えた。そこで第4時代を創出しようと叫びだした。600万年ほど続いた原始時代を第1時代、農業時代を第2時代、そして今日の工業時代を第3時代とみて、第4時代への移行を1973年から新聞でも訴え始めた。第4時代を創出することが商社の役割ではないかと考えたが、言葉だけでは周りの人に理解してもらえない。そこで、第4時代のモデルを目に見える形で示したいと思って始めたのがアイトワの暮らし。自由になる給料と自由時間で創った。人間にとって何が本当の豊かさであり幸せか?他者と比較して高価な持ち物を持つことで感じる豊かさは相対的な価値観であり虚栄ではないか?だから私たちは自然泥棒になっていたのだろう。資源は取り放題、水や空気は汚し放題、これではいけない。絶対的な豊かさの追求に転換しよう。美しい空気、穏やかな気候、生物が多様で季節がありホタルも飛ぶ。こうした未来世代とも共感できる豊かさを追求すれば、家族はいがみ合わずに和気あいあいとなれる。そのためには、各人は自己完結能力を高めないといけない。そこで、自己完結性を高めた各人が、お互いに”得手“を発揮して助け合う社会を創出し、移行すれば良いのではないか。

知らない事が多かった

徳永　3・11の災害で原発の仕組み、政財界のつながりがわかった。『日本の中枢の崩壊』と言う本を読んで、このままではいけないと思った。原発反対を唱えて隅に追いやられていた先生方がやっと世に出てこれた。そういう先生の本がたくさん出てきて情報が増えた。放射能のことを調べられる本が

ないし、原子炉の仕組みなど全く分からなかった。無関心や人任せにせず、個々がしっかりと物事を見極める必要があると思った。

今関　団地の話に戻るが、オール電化を検討していた人たちが、いろいろなエネルギーのことを考え始めた。私は素敵だと思っている。P・Cなどの電化製品は電気がなきゃしょうがない。だけど電力会社は熱エネルギーまで、すべて電気にして使えといっている。そうじゃなくて、交換できるものがいっぱいあるんじゃないか。暮らしの中でそういうものを発見する必要がある。

森　そのとおりですね。いろんなことが見えてきた。より踏み込んで考えるようになりたい。私が早くから原発はとんでもないと言い出したのは、技術的な問題じゃない。巨大資本しか手が出せないところに問題がある。自然エネルギーにしたら、わが家は風呂を薪で焚いていますが、巨大資本に頼らなくて済む。

できる工夫と使わない覚悟

今関　私たちが、今、覚悟できるかどうか。覚悟ができたら、先生方の出番、研究の成果から暮らしぶりの提案やエネルギーの作り方をどんどん出してほしい。私のような主婦が平和な日常を守る選択ができるように。最後の正念場がきた。

玉垣　朽木に住んでいて地域の繁栄には、自然を生かした観光を軸にするとか方向性はあるが、人が身の回りの自然と、お付き合いするには限度がある。自然と共生するには大変な努力が必要。今は5反百姓ですが、農薬はできるだけ使わないようにしている。そうしないと米を買ってもらえない。私の米を美味しいといっていただいていますが、今日のお話を聞いて、自分の生き様をどう考えるのか？現在はオール電化の暮らしです。年をとって来たので安全性と経済性を考えて。年金生活なので生活費の切り詰めのためにしたことが、少し軽すぎたのではないかと思われます。しかし、かつてのように裏山の木々を熱源にした生活に戻そうとすると、家の改造から…

…CO_2のことまで多くのことがあって

アイトワの森、太陽光発電で電力を賄う。森の中は自然が美しい。自生する植物を大切に育てる。

簡単に整理できない。自分のことだけを考えたら、田は1反作れば良い。しかし、里山を守っていこうとすると5反百姓をしなければならない。牛耕から耕運機に変ったときの喜びは忘れられない。楽になったという実感があふれた。堆肥のための草刈をしなくなり田周辺、里山がどんどん森林に姿を変えていき、やっと「これは大変だ」と気がつくまでに20年から30年が経った。何もかも合理化（楽をすること）が進歩だと信じてきたが、牛耕時代にもどすことが出来るのか、なんとも迷うことになる。

森　わが家では電気がないとやれないものが一杯ある。ですから電気を安く買おうという発想はない。そこで360万円も自己負担をしていち早くソーラー発電を導入したが、取材にきた新聞記者にはうまく理解してもらえない。耐用年数内に「150万円ていどしか発電しない機械になぜ大金をだすのか？」と。記者の憧れている車を聞くと何百万円かの車だった。そこで、私には車は軽自動車で充分だけど、電気はどうしても必要だからソーラー発電機の導入に憧れた、といったら分かってもらえたようだ。

水を汚してはいけない

徳永　この水の豊かな国で、地下水を飲めないところがある。水を買う国になっている。嘉田さんもおっしゃっているけれど、琵琶湖の水を汚してはいけない。

今関　滋賀県というところでいけば、原発がダメという言い方ではなくて、自分たちの暮らしと結びつけて発信していくことが必要。当然琵琶湖の水について声を上げることも。行政が琵琶湖が汚くなったときに早くストップかけなくちゃいけないと、下水道整備に力をいれたことに見られるように、一番大事なことをきちっと抑える。私たち住民は、石鹸運動のときに動いたという歴史を持っている。身近な大切なモノを守るという点から、水の問題は森林を含めてぜんぶ琵琶湖に集結してきているんだから、シンボル化していくこともいいのでは?花田眞理子先生が「琵琶湖をシンボル化したらいいじゃないですか」と以前おっしゃった。面白いと思う。

仁連　3・11を経験して、原発はどうかというよりももっと大きな選択をしなきゃいけないと思う。化石燃料も含めてそれに依存してきたということは、結局自然に利子を押し付けて、自分の意思決定の責任の及ばないところに負担を押し付けてしまうという社会だった。そうじゃなくて、自分の意思決定に責任を負う社会に転換していかなきゃいけない。非電化工房の暮らし方のように、自然の営みをパッシブに生かすことにより、自然を破壊することはあり得ない。日本人の知恵はまだ残っている。

今関　阪神大震災のときに、トイレが使えなくなって、みんなで穴掘りをした。一番困ったのは電気ポットだった。お湯を沸かしてポットに入れようとするんだけど、電気がないからふたが開かない。電気がなくても使える昔風のジャーが一番大活躍した。スイッチやボタンを押すだけで簡単に手に入れられる快適な暮らしを見直してみたい。

南淡路は戦っている

内藤　今までの話を集約できるような事例がある。淡路のあるグループが、南あわじだけは違う方向で行けないか、地域再生を図りたいと。淡路地域の伝統と文化、一次産業を立て直して地域の若者の雇用をつくるという社会を再生したい。単なる主婦が南淡路を動かし始めた。ところが、先端医療特区を展開して中国の金持ちを呼ぶというような外部資本での開発型の地域起し計画が出てきた。彼女は抵抗し、私にもなんとか助力を…と言うことで、いろいろやってみたけど「とっても抵抗できる相手じゃない」というのが結論だった。そうしているうちに、むしろ一主婦がいうと通るところがある。臆せず言っていたら、だんだん状況が変ってきた。それと特区構想があまり金にならないことがわかってきたのかもしれないが、いまは後退している。しかしまだ、従来型の開発派が強くて、彼女が代表をするビジョン委員会として〝地域内での経済循環を重視する〟ことを提起したとき、ある識者が、「神戸とか兵庫県の中心、さらには東京とつながって大きな産業資本をひっぱってきて、産業興しをせずに淡路に将来などあるか、ちゃんちゃらおかしい」という強烈な批判があった。地域を自立させることがこれからはいかに大事かを訴えても理解を得るのは困難だ。

今関　南淡路には私は1回お邪魔した、南淡路は人がつながっている。それがまだあるからいいなと。

内藤　人形浄瑠璃という伝統文化も根強く残っていて、小学校からやってるようですよ。

滋賀には地域文化がザックザク

徳永　わたしは東京、千葉、兵庫にも住んだが、滋賀県には自然も文化財もいいものがいっぱいある。他県に負けてはいない。もっと誇りに思っていいと思う。

今関　坂本のあるホテルに泊まったら、滋賀の民話を壁にはめ込んであった。人情豊かで人間の原型をみることができるような素晴らしい民話もたくさんあった。豊かな暮らしを考える時、文化を考えたい。文化的に掘り起こして何かを作り出すとか、文化を大切にアクションを起こすとか、地域が文化を掘り出して語り合いたい。

内藤　南淡路の規模だと割りと簡単だとおもうけど、滋賀になるとちょっと大きすぎる。いきなり滋賀では重たいので、軽量級の向こうでトレーニングをしてから…（笑）

今関　わたしがアイトワから学んだように、次は淡路から私たちが学べたら。東京で話したら滋賀県は小さいと言われるんだけど、滋賀から発信できるものが一杯あると思う。

仁連　東京に行くと逆に「東京はでかいからダメなんだよ」と言われるけど（笑）。

今関　滋賀だから考えられることがあるはず。だって、ここには人間らしい暮らしを探す手がかりがいっぱいある。内藤先生が、他者を思いやるとおっしゃったけど、そこが一番大事。〝たくさんの生命に思いを馳せる心〟で、他の国の人のことも地球全体のことも、同時代を生きている人のことにも思いを寄せていかないと。

まとめに変えて

五事を正す
井上 昌幸

「人間の学」（森信三著）「日本について学ぼう」を連載

「他者の心に思いを寄せる」。日常の生活で中江藤樹先生の『五事を正す』を実践することが、人間が生きていく日常の根本だ。講演会などでも言っているが、「貌、言、視、聴、思」というこの五つが日常生活でできるようになれば人間の社会は変わる。これは高島市安曇川の誇りだ。これは今から約2800年前の「書経」という古典の中から選ばれた言葉。人間の心というものは昔も今も変わらないということを知ってほしい。

出会いと議論と実践と
今関 信子

「心温まる物語」を連載。近著の『まんまる月夜の竹生島』が好評

わたしはレイカディア大学で手作り紙芝居をやっている。お年寄りが好きな題材で作るのだが、中江藤樹が出てくるんですよ。中江藤樹に教えられた、馬子が落し物を届けに行くと当たり前のことだからお金なんかくださいますな、といったと。普通に生活している人がわかってそれを実践している。そこまで言葉を砕いて伝えているのがすごいなと思う。先生方だったらいろんなテーマや課題を提示できるはず。普通に生活している人が、それに反応して、自分の暮らしから議論できたら素敵。そういうところから出会いにつながりたい。

心が根本
徳永 拓美

「愛する風景」（畑裕子著）のイラストを描く

高島市いまでも雰囲気がいいですね。井上先生のお話では、土産物屋のおばちゃんが、気軽に車で駅まで送ってくれるとか。400年たっても雰囲気がかわらない。「心が根本」というのが大事。人と感化していくことは難しい。小さいことでも生活の中から見せていかないといけないなと思っている。インターネットで、若い人とつながりたいなと思う。30～40代の人の考え方が知りたい。2000年を迎えるとき「いいことだけを未来へ、今日、今から」ということばを書いた。今、いろんなことが起きてるが、これからもこの気持ちを持ち続けたい。

アイトワの暮らしを普及
内藤 正明

"執筆者懇談会"のリーダー。対談は定評がある

いまは、淡路のほうがようや

く動き始めたのでお手伝いをして、現実にアイトワの存在感にインパクトがある。アイトワは一度見て欲しい。自然循環の生活モデルを作りたい。そしてアイトワの地域版を創りたい。

他者の生命に思いを馳せる

仁連 孝昭

〝小舟木エコ村〟実現の立役者。

「他者の命に思いを馳せる」という精神は、明治維新まで息づいていた。明治政府になって廃仏毀釈され、国家神道が導入され、ローカルな自然を敬うというのが壊された。そこに一つの大きな誤りがあった。いまそれをよみがえさせることが重要。中江藤樹じゃないけど地方にはまだその精神が残っている。明治近代国家では、和魂洋才といったけど、洋魂洋才で日本の魂をだいぶ壊してきた。日本の魂を元に戻すことができるのは東京ではなくて淡路とか滋賀県とかの地方ではないか？国が悪いといって批判しているわけではなく、自分たちの生活は自分たちで責任もちますよというのが基本。国が必要以上に介入するのは良くない。

あきらめより、覚悟を

森 孝之

〝愛と環〟の暮らし実践者。奥様は人形作家。

わたしは「あきらめ」よりも「覚悟」を、といいたい。たとえば、今、計画停電や節電の動きを「あきらめ」て受け入れているが、原発の導入時に、節電を「覚悟」のうえで導入を拒否しておきたかった。そのほうが原爆被災国に向いていたように思う。

集落の存続を

玉垣 勝

「秋の夜長を楽しむ夕べ」は恒例行事。旧朽木村の元村長。

原発のことで、敦賀原発も大飯原発も近いので、大規模事故が起こったらどうなるんやろうなというのが遠慮なしに出てくる。地域の連携の大切さを痛感する。高齢者世帯が集落の三分の一あるが、その人らとは集落の話し合いのときに、今回の東北の震災を受けてもう一回、横の連携を確認せなあかんと言う話がでた。小さい範囲だから絆が強くなるし、もういっぺん考え直していかないと。集落運営をどうしたら強固なものにできるか、いろいろ教えて欲しい。

――自然と資源を適正に使い守る（循環）、他者の生命に思いを寄せる（共生）、エネルギーを無駄に使わない覚悟（抑制）。改めて、もったいない・おかげさま・ほどほどに、が次代へのキーワードであることが確認できた。地域を守るのは、ほかでもない私であり貴方だ。自分の暮らしを今こそ自分らしく多様な角度で創っていくことから始めたい。本日は勇気を下さりありがとうございました。

Eco-ProgressからEco-Evolutionへ

～幸せな社会を未来に手渡すために、今、何が必要か？～

花田 眞理子
大阪産業大学 人間環境研究所 教授

はじめに

日本の歴史の中で平成23年という年は、3・11の東日本大震災が起きた年であると同時に、環境に対する考え方、生き方に関する考え方が大きく変化した年として記録されるに違いありません。

平成7年の阪神淡路大震災と今回の違いは、津波による被害の範囲が圧倒的に広かったこと以上に、原発事故が発生したという点です。天災被害を免れた地域の人々が、自分たちが使うわけでもないエネルギー供給の為に、住む家も仕事も、農林水産の自然の糧も、すべて奪われることになった衝撃は、エネルギー多消費型の社会に慣れてしまった日本を揺るがしています。

被災地への想いと原発事故

震災当初、罪なき人々の上に降りかかったあまりに理不尽な運命に、日本中の人が、自分にできることは何か、できることがあるなら何でもやろうと思ったに違いありません。被災地の方々の毅然とした節度ある態度に、同じ日本人として誇りを感じた人も多かったはずです。お互いを思いやる人と人の絆の強さと温かさに、感動を覚えた人も少なくありませんでした。当時、多くの人々が、素直な感情の発露として、同胞の痛みを少しでも軽くできないかと、思い続ける日々を送っていました。

ところが原子力発電所の事故の深刻さや、原子力村と呼ばれる官民癒着と隠蔽・保身体質が明らかになるにつれて、人々の感情は、誰が悪いかの犯人捜しと、対応のまずさに対する非難譴責や怒りに変わってきました。その結果、自分ができる事はないかと知恵をしぼったり、被災された方に寄り添おうとする気持ちが薄れてきているような気がしてなりません。こうした他者への共感から出発して皆で考えなければならない課題、すなわち、これからの社会を、被災地だけでなく日本全体でどうつくっていくかという根本的な課題が、忘れられていくような危機感を感じているのです。

原発事故が教えるものは

現時点で、原発事故の収束はまだ見通しすらたっていませんが、これほどの犠牲を強いて今回の事故が私たちに教えようとしていることは何か、それは、便利さや過剰な快適さを追求する科学技術の進歩がもたらすものが、必ずしも幸せで豊かな未来ではない、ということではないでしょうか。もっと速く、もっと多く、もっと手軽に……という欲望を充足するために、あるいは欲望そのものを作り出しながら、飽くなき商品開発を続け、技術を進化させた結果が、エネルギーを大量に必要とする近代産業社会でした。20世紀の終わり頃からやっと「地球環境問題」に気付き、資源も有限、また廃棄物を処理したり浄化したりする自然の能力も有限だと、地球の「環境容量」の限界が指摘され始めたとはいえ、それに対する方策は、省エネ性能の向上など、技術進歩というEco-Progressにとどまっていました。それではとても間に合わない、環境制約や資源制約の中で、従来通りに

グローバル化を推し進め、成長を希求し続ける経済モデル自体に無理があるのだから、社会そのものが進化（Ｅｃｏ-Ｅｖｏｌｕｔｉｏｎ）しなければならない、とはっきり示したのが、今回の事故ではなかったでしょうか。

グローバル化経済モデルと固有文化の衰退

経済のグローバル化が進むにつれて、地球の東西南北、どこへ行っても同じようなハンバーガーチェーン店があり、同じようなハンバーガーが食べられるようになりました。それは同時に、消費文化の拡散化と同質化を促し、固有文化を無意味化していくものでした。

グローバル経済における効率化にとって、具体的な「或る場所」や「多様性」は邪魔にしかなりません。徹底したコスト削減が求める均質的な技術主義によって、固有の文化は片隅に追いやられ、特に後発の途上国の地場産業や、歴史文化に基づく地域共同体などは姿を消していったのです。

経済成長モデルと電気依存社会

一方、成長を前提とした経済モデルも限界を露呈し始めました。まだ経済発展の初期段階では、新製品や新サービスの提供は、人々の暮らしをどんどん豊かにしていきます。洗濯機、冷蔵庫、炊飯器、電話、自動車などの登場が、どれほど私たちの暮らしを便利に、楽に、してくれたことでしょう。

しかし、経済が発展し、モノがあふれ、人口増加も一段落し、社会生活上の需要がある程度満たされた段階になっても、経済成長モデルは立ち止まることを許してはくれません。ＧＤＰが増加して、所得や貯蓄などの「買い取る能力」はあっても、「欲しがる気持ち」が枯渇しているという需要の飽和状態で、それでも無理やり需要を引き摺り出さなければ成長は続けられない。その結果が、愛着を持つこともないたくさんの家電製品に埋もれた日本の家庭生活です。

一家に1台で皆が囲んで鑑賞したテレビも、客間に集まって涼んだエアコンも、一人に1台、一部屋に1台となり、家族の数より多いという家庭も少なくありません。その結果、家族はばらばらの部屋で時間を過ごすことになり、コミュニケーションは希薄になり、その絆は弱まっていきました。

携帯電話もパソコンも、食器洗浄乾燥機も暖房温水便座も、この10数年の間に急速に普及してきましたが、いずれも電気を必要とするモノばかりです。電気がなければ全く機能しないモノばかりです。

こうして、私たちが「もっともっと」と電気を求めていった結果、化石エネルギーに起因する気候変動（地球温暖化）が国際的な問題となってきましたが、そうなればなったで、エネルギー需要の必要性を問い直すことなく、安定供給の必要性ばかりが声高に叫ばれるようになりました。原子力発電は運転中にCO_2を発生しないというただ一点をもってクリーンな発電システムであると位置づけられ、発電所が増設されていきました。２０２０年までに温室

効果ガスを25％削減するためには、日本国内に原発をさらに10基以上増設していくという政策も打ち出されたほどです。10万年という気の遠くなるような半減期をもつ使用済み核燃料をどんどん排出する原子力発電は、人類の技術革新程度でコントロールしきれる代物ではないことぐらい、長期的な視点に立てばすぐにわかることでしたのに。いったん暴走し始めたら、環境被害は計り知れない、コントロールもできない、そんなものに頼って、私たちの生活は経済成長の名のもとにどんどん肥大化してきたのです。

グローバル経済成長モデルを再考してみよう

しかし、こうしたグローバル経済成長モデルには絶対的な限界がある、ということを今回の事故は甚大な犠牲を払って、私たちに示してくれました。先は断崖に続く道を、今は快適に走れるからと言って闇雲に突っ走っていくのではなく、ここで一回立ち止まり、

東京の地下鉄構内（平成23年5月28日筆者撮影）
5列の蛍光灯のうち、ホーム両端の2列を除いて、ホーム中央の3列は管が抜かれている。 別に不便も支障も感じない。むしろ以前が無駄に明る過ぎたとの意見を多く聞いた。 また、柱に貼った普通の掲示は読めるが、中の電気照明が消えたホーム案内は読みにくい。電気を前提とした施設の多さと電気がなくなった時の不便さを感じた。

考えてみましょう。当たり前の知性と感性のスイッチを入れてみましょう。

まず、その土地という「場所性」のもつ固有な文化や、人間関係の価値を見直してみましょう。

市場で付けられた価格だけで何でも判断するのではなく、お金には還元できない価値や考慮されていない価値を加えて再評価しましょう。こうした価値をどうすれば価格の形で市場メカニズムに載せていけるのか、考えてみましょう。

そして、短期的な省エネや節電にとどまらず、長期的な視点を持って、いま一度自分たちの生活を見直してみましょう。

こうして、一人一人が環境容量を意識し、つながりや多様性などの価値を評価し、長期的な視点を持って判断することのできる環境リテラシー能力を高めていくことによって、新たな環境価値文明への大転換が可能になります。これぞEco-Progressを超えたEco-Evolutionという、第二の文明開化、いや文明開花だといえましょう。

文明の開花に必要な智性と徳性

福澤諭吉は「文明論之概略」という著書の中で、「文明」の定義を「人の身を安楽にして心を高尚にする」ことであり、「衣食を饒（ゆたか）にして人品を尊くする」ことだと定義しています。

しかし、経済成長志向の技術進歩

福澤諭吉「文明論之概略」。今一度、原点を理解しよう。

（progress）は、生活を楽で便利にし、物質的に豊かにする一方で、品位や節度といった人間の徳性の向上を忘れてきたような気がします。暮らしの安楽と人品の向上を文明と呼ぶのなら、両方を実現するのは人間の智性と徳性の両輪のはずでした。徳性なき技術進歩は、飽くなき貪りを続け、人命にかかわるリスクをも無視し続け、ついには環境容量を超えて、後世に取り返しのつかない被害を残すのだということとが、今回の事故の教訓です。

Eco-Evolutionに向かって

今こそ、環境問題の本質を感じ取り、その全体像を理解できる環境リテラシー能力を上げていくEco-Evolutionが求められています。

私たちが今、この大改革に取り掛からなければ、もう二度とチャンスはありません。数万の生命と、数百万の生活の犠牲を無駄にすることは、到底許されることではありません。

ほんの百年余りの間、地球上にいた人間たちのエゴの遺産ではなく、真に豊かで幸せな社会を未来に残すために、社会のEvolutionに向かう岐路に私たちは立っています。つながりの再構築と環境リテラシーの向上を通じた「環境価値文明」への転換が、今、私たちに求められているのではないでしょうか。

今日の経験を明日の力に
花田真理子

●はなだ まりこ＝大阪産業大学人間環境学研究科教授

〈専攻〉

◎環境経済論（経済と環境の両立可能性に関する実証研究）

◎環境コミュニケーション（各経済主体を環境配慮へ動機づけるための行動科学的研究「お得で楽しく美しく」）

◎環境教育（プログラム開発・協働による地域づくりの実践）

●対談
岡田 知弘
京都大学公共政策大学院・教授

内藤 正明
ＮＰＯ循環共生社会システム研究所
代表理事

〈 未来につなぐ「社会・地域・技術・人」— ④ 〉

日本再生のカギは「共」の力と「自治力」

東日本大震災から約半年。被災地が復興に向けてさまざまな取り組みを進める一方で、支援がなかなか進まない社会のひずみが、少しずつ明らかになってきました。日本が本当の意味で立ち上がるために、私たちは何を考え、行動すればいいのでしょうか。そのヒントを探るため、京都大学大学院経済学研究科の岡田知弘教授にNPO法人循環共生社会システム研究所の内藤正明代表がインタビューし、また共に語り合っていただきました。

■NPO法人 循環共生社会システム研究所／京都市左京区
■2011年7月21日

被災3県が取り組む復興構想の本質とは

内藤　東日本大震災の津波被害、そして原発の問題は、日本人がいまの社会の問題、特に「地域のつながり」を再考するきっかけになったと思います。岡田さんは、歴史的な形成過程から見た地域の経済活動とまちづくりについて研究されていますが、今回の災害地でも調査されていますが、被害が大きかった福島県、宮城県、岩手県が、それぞれの復興構想をもとにどんな歩みを進めているのか教えてください。

岡田　興味深いのは、岩手県の取り組みです。震災前に住田町というところで、町長と第三セクターの木工会社が連携して、気仙材という地元材を使った戸建ての仮設住宅を供給するシステムを事業化する準備を進めていました。震災後、なかなか仮設住宅の設置が進まないことがニュースになりましたが、ここはどこよりも早く、被害がひどかった近隣の大船渡や陸前高田の被災者にこの仮設住宅を供給したんです。外の音が聞こえにくいし、暑さ寒さも和らげるという木独特の良さもある。解体すれば別のところでも使えるし、どうしても使えなかったら燃料にできるとあって、かなり評判が良いものでした。

内藤　偶然とはいえ、被災地の要望に非常にマッチしたものだったのですね。

岡田　はい。特筆すべきは、地元の資源と職人さんの力を活用しながら、地域内の再投資力を再生していくというこの取り組みを、行政がサポートしている点です。福島県も、同じ発想で「地元枠」を作って復興に取り組んでいます。ところが、宮城県だけが大手のプレハブメーカーに一括丸投げで、結局建設が一番遅れてしまったんです。

内藤　宮城県の村井知事は、〝創造的復興〟という議論をしていますが、それが関係しているのですか？

岡田　彼は、これまで通りに戻す「復旧」ではダメで、より「強い」、新しい東北や日本を作る必要がある、と主張しています。漁業権も漁協が持っていると生産性が低いままになってしまうので、復興特区を作って民間の水産関連企業が参入しやすいようにするべきだ、と。つまり、ここでの価値観の基準は「国際競争力」であり、TPP（環太平洋経済連携協定）対応型の漁業にするための法人経営を作ることなんです。農業も同じように考えています。

内藤　日本の小さな漁港というのは、沖合に定置網があり、その近場で養殖の筏を組んでいて、港には共同の水産加工施設があり、そこで加工されたものが市場に行ったり、旅館や民宿で販売するという、1次産業から3次産業まで地域で複合化された形でまわっているはず。それが地域の歴史や文化にのっとった工夫でしょう。仮に漁港の復興に手をかけないということになれば、このような6次産業の仕組みが成り立たないから地域崩壊になってしまいませんか。

岡田　その通りです。漁港が修復できず地場産業が崩れると、それらの地域では生活ができなくなり、生活保護や社会保障給付だけが増え、財政危機がより進んでしまいます。また、宮城県の計画を聞いて驚いたことがもうひとつ

❶陸前高田市市街地　❷陸前高田市内の崩壊した漁港　❸水没した陸前高田市役所（2011年5月13日）
写真：岡田知弘

あります。震災直後に、N総研が震災復興計画を作ってきて無償で宮城県に提供しているんです。さらに、宮城県の震災復興のための県の委員会メンバーのほとんどが、東京人で構成されていて、会議も東京で行なわれているんですよ。

内藤　おそらく彼らは、この機に大きな公共事業を打ちたい、あるいは農業や漁業に参入したい、大きな資本として入っていきたいというふうに、「市場」として捉えているということですかね。

岡田　そうですね。私は、漁港や農地、道路、鉄道などの復旧は公共投資として条件整備を国が責任を持ってやり、それを土台にして自立のための復興支援を惜しまないという政策の姿勢が一番必要だと思っているんですが。

内藤　福島・岩手に対する宮城。いまの日本の典型的な二つの状態を示していますね。大きな既得権益が後ろにあって、国の財政をあてにした東京の大手資本が進出してくる。でも実際は、国の金を食いつぶしたらすぐに去っていくし、地元に残るのは巨大な遺跡だけ、というパターンが多く見られましたね。

❹津波と火災に襲われた気仙沼港（2011年5月12日）❺仙台市若林区荒浜地区の惨状（2011年5月13日）❻震災5カ月後も続く避難所生活（気仙沼市内　2011年8月12日）

今回のケースがこれでないことを願いたいですね。これからは地域の社会的、自然的資本を基に、歴史を踏まえた地方の力や知恵で街を創りあげていくことができればいいのですがね。住民もそれを語り継がなくてはいけないですし、そのためにも市民が中心となって、行政と民間企業をつなぐ「共」の仕組みが大切だと思いますがね。

岡田　その通りだと思います。今回の震災と原発事故で、食料も水も空気も、東京の近くが汚染されたら首都はまったく機能しないという、東京一極集中のもろさや弱さがハッキリ浮き出ましたしね。やはり地域ごとの資源を活かして地域内再投資力を高め、いかに自律型地域を作っていくかが大切です。そのために被災地では、まず「バリアを張る」ことが大事だと考えています。復旧・復興過程で受注すべき事業の優先順位を地元企業からつけていき、そのうえでできない仕事は域外企業にまかせる。その場合も不当な復興利得を本社のある東京に持ち帰ってもらっては困るので、被災地への社会貢献をしっかりと

コンパクトシテイが突破口（両氏）

求めていくというような、2重3重のバリアを作ることが大切だと思います。

自治体と民間企業をつなぐ「コンパクトシティ構想」の可能性

岡田　過去の歴史からみても、プレートの動きに連動した巨大な海溝型地震や直下型地震が西日本で起こる可能性は非常に高いとされています。福井の若狭原発から、琵琶湖は30キロ圏内ですから、今回の震災の退避圏内と重なりますね。つまり、私たちは原発という危険な構築物と共存しながら生きているわけです。今後の課題として、西日本でも原発に依存せず、地域の自然エネルギーを活用した小規模分散型の安全なエネルギーを活用した小規模分散型の安全なエネルギーを、地域ごとに循環させて、自然と人間が共生できる地域を、人間の生活領域ごとに創りだすことが必要であると思います。そういった「コンパクトシティ構想」は、まさに内藤先生が提唱しておられたことですね。

内藤　「コンパクトシティ構想」がひとつの突破口にはなると思います。自然エネルギーなど再生可能なエネルギーは、集中型ではなくてコンパクトな形でしか得られないものです。つまり、自然エネルギーは地域の独立性をマッチしやすい特質を持っていますね。大資本が乗り出して、メガソーラーを設置されてその利益は持っていかれるということがないように、地域コミュニティレベルでのエネルギーを作り、資源も経済の流れもそのなかで完結する方向が大事ですね。

岡田　地域のなかで循環する経済環境を作るということですね。その際、自治体の役割と大きさが問題となります。実は、平成の大合併で地域の暮らしが維持できなくなったところが増えてい

るんです。たとえば、岐阜県高山市は合併によって香川県や大阪府よりも大きい、2000平方キロメートルもある巨大な自治体になりました。高山市街地から最も離れた、野麦峠のある旧高根村というところは、合併後の4年間で人口が3割も減っているんです。その理由は役場がなくなって支所になり、小学校と中学校が統廃合で隣の村に合併されたことにより、子どもを持っていた公務員が山から下りた。しかも雪深い地域ですから、残された高齢者も山を下りざるを得なくなり、人口が減り続けているんです。国土保全効果も本当になくなってしまいました。

内藤　もし役場が残っていて、そこに職員がいて、財政的にも地域に循環させるような核があれば、まだ守れたわけですね。でも、結局合併によって出来なくなってしまったということ。行政の役割は、収益性が伴わなくても必要なことをする。各地域の地勢条件とか気候に応じた形で、いかに合理的に自然エネルギーや食糧と向き合っていくかが、成功の鍵ですね。

岡田　そのなかで、新潟県の上越市がおもしろい試みをやっています。14もの市町村が合併して1000平方キロメートルの市域に20万人が住んでいます。ひとつの問題となったのが、あまりにも広すぎて、大変な豪雪地帯もあれば、雪はほとんど積もらない地域もあります。同じように除雪費を計上しても、片方は足りないし、もう片方は使いようがないわけです。そこで、旧市町村単位で地域自治区という制度を作りました。地域のことを議論する地域協議委員も公募公選で選び、合併協議の際に約束したことを変更する場合は、必ず地域協議会の合意を得ないとできないという仕組みにしたんです。

内藤　つまり、市役所に財源を集めて公共投資で何か作るという、お役所仕事ではもうできなくなったわけですね。

岡田　そうです。市はハード事業でもソフト事業でも好きに使えるように、一つの自治区に500~1400万円の予算をあてた。それを活用して、ある区はスクールバスの運用が必要になったので、そのための資金を複数の自治区で連携して出そうということで議論した結果、認められた例もあります。さきほど、内藤先生が言われた「自治体と民間企業」をつなげられるのは、そういう地域自治組織なんですよね。これが、コンパクトな地域づくりに必要なのではないかなと思います。市は合併して大きくなった町の基盤となる道路などの共通部分のみを整備するという役割分担でいいと思うんです。

内藤　そうですね。参入してくる資本も厳選して地域と一体化できる形を作ることが大切ですね。

企業誘致と利権構造が地域にもたらす光と陰

内藤　被災地への資本の参入のあり方が話に出てきましたが、過去の歴史のなかで企業を誘致した地域で何が起こったのかについて興味があります。たとえば、滋賀県は琵琶湖周辺に広大な平野があり、道路網が整備され、交通網の幹線の接続が容易であることから企業の工場進出が多いのですが、地域が企業の

進出を呼び込んだ場合、本当に地元に富をもたらしているのでしょうか？

岡田　滋賀県の場合は分工場が多く、そこで生産された多くの所得が、本社のある東京や大阪に移転されてしまうという問題があります。

内藤　具体的にはどんな問題でしょうか？

岡田　過去に調査した例でいうと、岐阜県美濃加茂市にある大手電子機器メーカー・S社の工場は、従業員のうち600人が正規雇用で、そのほとんどが愛知県一宮市にあるS社の本社工場に勤めていた人が通勤していました。さらに非正規雇用として150人くらいの臨時工がいましたが、そのほとんどは沖縄の若い女性たちでした。つまり、地元の人々ではないんです。現地法人の形態を取る理由は、「賃金水準が違いすぎるから」でした。一宮と美濃加茂は30キロ程度しか離れていないのに、賃金水準は10％程度も違う。つまり、S社の本社の賃金体系を適用したら損をするし、もう一つの理由は税制上の優遇措置を受けるために別会社を作った方が有利だと判断したからです。

地域経済の継続的発展を（岡田氏）

内藤　すると、地元に落ちる金っていうのは、結局「固定資産税」だけですか？　土地やインフラなども無償供与が多いですしね。

岡田　その通りです。美濃加茂の場合は現地雇用がないうえ、地元の下請け取引会社もほとんどありませんでしたので、不動産関係の収入や県・市の税収が増えるということが主な経済効果です。もうひとつの例は、大手総合家電メーカーのSH社。ここは三重県と亀山市が誘致したんですが、第一工場を閉鎖して堺に移ってしまいました。それで、三重県がSH社に支払っていた巨額の企業誘致補助金の返還を求める騒動がありましたが、実は問題が起こる前に亀山商工会議所がある要望書をSH社に対して出していました。それは、「地元の商店街でもっとモノを買ってほしい」というものでした。

内藤　つまり、工場を誘致したのに、期待していたほど町は潤わなかったということですか？

岡田　はい。SH社の亀山工場も、天理の工場を閉めて通勤してきている従業員が多く、また請負労働者や派遣労働者はマイクロバスで通勤してくるので、商店街で降りて買い物するという

ことがないわけです。一時は、技術者や出張者が泊るビジネスホテルや簡易アパートなんかが賑わっていたらしいですが、いまは本当にお客さんが減っている。そういう意味では、現代のハイテク工場の波及効果は大工場で1万人近くの人が直接、間接に働ける高度成長の時代の話とは全然違いますよね。

内藤　ハイテク工場になればなるほど、人は雇わないですしね。

岡田　それに、税の優遇制度があるので、税金もさほど払ってはいないし、派遣労働者の場合、移動が激しく、住民税等を捕捉しきれないという問題も指摘されています。

内藤　しかし、社会インフラは現地が整備しないといけないですよね。

岡田　そうですね。さきほどのS社の場合は、岐阜県が国道への取付道路を建設してプレゼントしました。先行投資がすごくかかります。自治体側は、かなりの補助金をつけたり、公共投資で条件整備をして誘致をするのに、多国籍企業ほど、次の有利な立地点を考えていますので、10年後には工場が閉鎖されたり、縮小されたりして、地域が衰退するということになります。これは、大型店も同じですね。

内藤　こうした企業のケースにおける、出費と回収のバランスシートはどうなっているんですか？

岡田　計算しようと思いましたが、さすがに企業は細かいデータは出しません。戦後の地域開発政策の共通した問題なんですが、事前のアセスメントは形式的にやるのに、事後アセスメントは一切やらないんですね。事業をした結果、収支計算がどうなったかをアセスメントすることはなく、事業評価にもならないんです。事業評価自体、第三者が見て本当に効果分析をやっているかというと、これも疑問です。本当に、〝地域経済の持続的発展をどうするか〟という考えが日本には定着していないんだなと思いますね。

内藤　情報公開も同じですね。情報公開条例ができてから、情報公開することを前提に資料を作るから、出したくない情報ははじめから情報にしないという流れができてしまった。

岡田　最初から評価の軸がぶれて、狂ってしまっているんですね。本来は、事業の目的自体がどれだけ達成できたのか、できなければなぜなのかをきちんと

モノを言える市民をいかに育てるか（内藤氏）

評価して、よりよい施策に改良すべきなのです。今回の震災に関しても、被災状況や復興計画についての客観的情報を共有することを大前提として、本当にその復興事業が復興に役立っているのかどうかをチェックする仕組みを作らないとダメだと思います。それも、被災者自身が求めていく必要があると思います。

内藤　これからは、モノを言える市民をどう作っていくか。自治体はしっかりと考えていかないといけませんね。

岡田　そうですね。住民もまた、自分たちの地域の歴史や経済、財政のあり方、そのほかにも、たとえば使われていない土地や水源を、今後の暮らしや、いざというときの安全確保のためにどうやって使うのかとか、そういった細かいことも含めて、全体としてどうするかということにアンテナを張っておく必要があると思います。そして行政職員も、住民の声に反発したり怖がらずに、一緒になって見直し、地域を創っていくという柔軟な姿勢が必要ですね。そういった「自治力」が、今後の日本再生のカギになってくるのではないでしょうか。

内藤　今回の震災で、多くの国民がその「自治力」の大切さに気付いたのではないでしょうか。これからどういう動きになるのか注視したいと思います。本日は、どうもありがとうございました。

知は力
岡田知弘

●おかだ ともひろ＝1954年富山県生まれ。京都大学大学院経済学研究科博士後期課程修了後、岐阜経済大学講師・助教授を経て、1996年より京都大学大学院経済学研究科教授。日本地域経済学会理事長、自治体問題研究所理事長を務める。専門は、地域経済学、農学経済学。著書／『地域づくりの経済学入門』（2005年、自治体研究社）、『一人ひとりが輝く地域再生』（2009年、新日本出版社）、『新自由主義か 新福祉国家か』（共著、2009年、旬報社）、『増補版 道州制で日本の未来はひらけるか』（2010年、自治体研究社）など。

知足
内藤正明

●ないとう まさあき＝1939年大阪府生まれ。1962年京都大学工学部卒業、1969年同工学博士、1974年 国立環境研究所主任研究官、1990年同統括研究部長、1995年京都大学工学研究科教授、2002年同大学院地球環境学堂長。佛教大学社会学部教授。現職／琵琶湖環境科学研究センター長、京都大学名誉教授、（NPO）循環共生社会システム研究所・代表理事、（NPO）KES環境機構・代表理事、他。著書／『持続可能な社会システム』、『地球環境と科学技術』岩波講座 など。活動／持続可能社会の理念と実現方法に向けた研究およびその実践活動。

M·O·H レポート1
〈 未来につなぐ「社会・地域・技術・人」— ⑤ 〉

中山間地域で温故知新を形にすると、里山と都会がマッチングする（手前が太陽光発電パネル）

自給自足の里山の暮らしを今に

豊田市里山くらし体験館「すげの里」

ワダ マキ

　里山くらし体験館「すげの里」は、中山間地域の再生モデルとして、都市と農山村の交流や、中山間地域への定住を進める。空き家情報の提供や里山くらしの相談、新規定住者の受け入れなど専従のスタッフが応対する。エコで自然に優しい循環型のくらしを現代に実現実現。すげの里を、３４才高島在住既婚アクセサリー作家の目線で取材した。

34才既婚女性の目線で

3・11以降「電気なんて関係ないよ」と誰も言えなくなってしまった。あまりに悲惨な福島の現状を見て、電気について詳しい訳でも何でもない私まで、エネルギーについて考えるようになった。今暮らしている滋賀県高島市は、お隣、福井県の原発銀座から、20〜30キロ圏内に入る。そんな高島だからこそ声を上げようと友人たちと「さよなら原発高島パレード」を企画しデモを行った。

今までの、電気に詳しい人たちだけで勝手に進めてくださいという姿勢が、結果このような現状を生み出してしまったのなら、私のような普通の人間も考え、どうしていくべきなのか関心を持ち続けるしかない。

今回、私にこのような取材の話が回ってきたということは、やはりそういう時なんだ。それなら堂々と「電気に詳しい訳でも何でもない人」の目線で書かせていただこうと思う。

間伐を進めよう

滋賀から高速で3時間、豊田市足助（あすけ）町へ向かう。足助町は、かつて三河湾からの塩や海産物を信州へ運ぶ塩の道「中馬街道」の中継地として栄えた地。国の重要伝統的建造物群保存地区にも選定された情緒ある美しい町並みが川沿いに並ぶ。2005年に豊田市に6町村が編入され、足助町も豊田市となった。

高速を降り山間を抜けたら、渓谷が広がる。雨降りの渓谷には、何とも言えない水々しい空気が立ち込め、匂いも色も何もかもが深く感じられた。そんな空気の中、豊田市役所足助支所の松原真さんに案内され、紅葉で有名な香嵐渓（こうらんけい）を横目に、目的地へ向かう

目的地の「豊田市里山くらし体験館すげの里」は、中山間地域の再生モデルとして、都市と農山村の交流や中山間地域への定住を進めることを目的として作られた施設だ。空き家情報も充実しており、実際に都市からの移住が決まりこの施設で臨時職員として働いている方もおられるようだ。自給自足によるかつての里山の暮らしを参考に、エコで自然にやさしい循環型の暮らしを意図し、薪ボイラーや薪ストーブ、太陽光発電なども導入されている。

向かう道すがら「間伐を進めよう」と山に掲げられた横断幕がいくつか見え、間伐が行き届いて、木と木の間が広く下草も生えた美しい山の姿が印象に残った。地元にものすごくやる気のある方がいるのか？　それとも行政が間伐に力を入れているのか？　足助という地に興味が湧いた。実際この施設も、地元の木材を積極的に使っていて、今年5月にオープンしたばかりで、心地よい木の香りに包まれていた。

新盛里山耕流塾が発端

「もともと地元の方が『新盛里山耕流塾』として、都会の人に里山に来てもらう活動を積極的にしていて、さらに活性化するために、地元の人と都会の人の交流の場として、豊田市が協力するカタチでこの施設を作りました」と、松原真さん（豊田市役所足助支所地域振興担当係

❶ 都市住民とともに耕作放棄地の解消に汗を流す　❷ 交流会では、楽器の演奏を楽しむことも　❸ 五平餅は郷土料理。みんなでワイワイと　❹周辺の竹を使った即席の流しソーメン大会

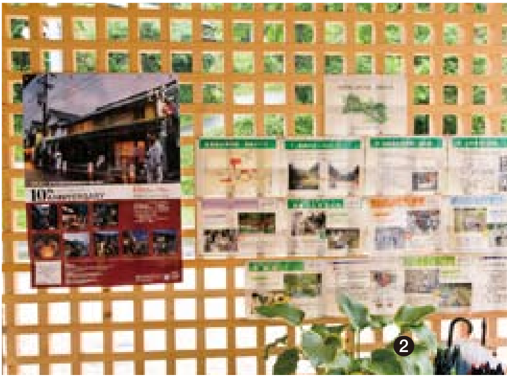
長）。村編入で一気に農山村の面積が増え、農山村の活性化にも力を入れている。

「行政の意向で進めるのではなく、地元の意向を大事にしています。行政はむしろそれをお手伝いしているような立場です。学識者、行政、住民がみんなでプランニングして、この〝すげの里〟が作られました」

この辺りはもともと地図には表記されていないが、植物の「すげ」に由来し、菅田和と呼ばれていた。里山の暮らしで「すげ」を傘にしたりして使っていたこともあり施設の愛称も「すげの里」になった。

屋外には、調理も可能な大きな土間スペースがある。地元の「五平餅」作り体験や、山菜採取イベントなどコミュニケーションの場として利用されている。

その隣には大きな薪ボイラーが設置されており、木を燃やして発生した熱がお湯に変えられていた。熱はお湯に変えて利用するのが一番効率いいそうで、この薪ボイラー一台でお風呂3杯分のお湯を一気に沸かすことができる。さらにこのお湯は、床暖房にも使われている。



❶「すげの里」全景。平成23年5月オープン　❷格子の裏面を使って情報共有　❸給湯と暖房をまかなう薪ボイラー

さすがに7月なので体験できなかったが、体が下から温まるので、部屋にいてもお風呂に入っているような温まり方を味わえるそうだ。さらに薪ボイラーは、火力が強いため、普通の薪ストーブでは使えない切ったばかりの杉も燃やすことができる。実際どこの山を見渡しても、杉やヒノキばかりが目につく。

「昭和初期には足助町は林業で潤っていました。芸者さんを呼んで豪遊したという逸話も残っています。今は木材の価格が下がり、手を入れることが難しくなってしまいました。美しい山に戻したいという気持ちはみんな同じで、ここで燃やす木も地元の方が間伐してくれています。そんな風に少しでも地元の人が自分の山に手を入れるきっかけになればと思っています」と、松原さん。

日本の山は、数十年前に「お金になる」と信じて植えられた杉やヒノキが広い範囲を占めていて、育った頃にはお金にならないどころか手入れに「お金がかかる」ようになってしまった。お金にならない使い道のないものを進んで

❹大きな吹き抜けが一体的な空間を演出　❺囲炉裏を囲んでゆったりとした時間が流れる　❻大きな薪ストーブが暖かく迎えてくれる　❼香り漂う檜風呂

管理しようと思う人は当たり前だが少なく、杉は税金がかかるからと、間伐され、運び出すにもお金がかかるからと、そのまま放置されるのが現状。

私自身、2年前に大阪から移住し、山の近くに暮らし、毎朝犬と散歩に山へ入っているので、伐採されてもその場に転がしておくしかない杉をどうにかできないものか?と日々感じていた。だから、この薪ボイラーがもっと普及し、価格も下がり身近なものになれば、明るい未来が描けるかもしれない。

足助千年ゼミ

玄関ホールには薪ストーブ、部屋は囲炉裏と床暖房。都会ではなかなか味わえない天然エネルギーの温かさを存分に楽しめる施設になっている。

実際ここで、高野雅夫教授（名古屋大学大学院環境学研究科教授）の呼びかけで「足助千年ゼミ」という意見交換会が行われている。千年持続可能な社会を作ることを目指し「これはできないとは言わず、どうしたらできるかを

考える」というのが、唯一のルールなのだそうだ。

子どもにアレルギーがあり食品について考えるようになったお母さんなど、自分の実体験から問題意識を持った方が集まり、農山村の問題、食品、過疎、エネルギー問題など、身近な問題について話し合われていて、それがこの足助町の方々の活動にも大きく影響しているそうだ。

施設の外には、畳10畳ほどの大きさの太陽光パネルもあった。残念ながら今のところ施設の電気が全てこれで賄われている訳ではないようだ。太陽光パネルはあの大きさでこの施設も賄えないのか？と、正直ちょっとガックリしてしまった。

そして隣の小川には手作りの小水力発電機が設置されている。ここで発電した電気は田んぼの電気柵に使われていた。ちょうど製作者の鈴木智さんが、機械のメンテナンスをされていてお話しを聴くことができた。

もともと技術職だった鈴木さんが「千年ゼミ」の高野教授の作ったものをお手本に、改良を重ね試行錯誤の末、完成させたものだそう。私も友人たちと、小水力発電できないかな？と勉強していたので、実際作られた方にお会い出来て心が弾んだ。

小水力発電は、水の流れを利用して、スクリューを回転させ発電するシステムだ。文字通り、そんなに大きな発電を目指したものではない。発電量は水の量や落差、スクリューの大きさにより異なるが、小さいもので電球に灯りをつける程度のものや、2～3軒の家庭の電力をまかなうもの、40軒分の家庭の電力をまかなう大きなものまで様々。用水路にそのまま設置しては、流れてきた枯葉などが詰まってしまいやすいので、滑り台のような水路を作り、そこに水を誘導して、安定的に発電できるよう工夫されていた。この設備なら少ない水の量でも集めて水量をコントロールできるし、傾斜も自分で作れて、かなり設置場所の幅が広がる。これを一号機として、この集落の電気柵は小水力発電にシフトしていく方向だそうだ。

「新盛里山耕流塾」では、小水力発電のキットを作ろうか？製作教室開こうか？と検討中。来年には田んぼも借りて電気柵も必要になるなと夢見ている私には、実に興味深い話だ。

自分たちが荒らしてしまった

《自分たちの世代が、山や田畑を荒らしてしまった》《子どもの頃の美しい里山を再生し、子供の世代に引き継ぎたい》

鈴木さんもメンバーである「新盛里山耕流塾」のスローガンだ。

誰もが認めたくない自分たちの非をこんなに堂々と受け入れ、さらに里山の再生をあきらめていないポジティブさは一体どこから来るのだろう？　私も里山で暮らしてみて感じるのは、里山には「壊すのは簡単だけど、再生させるのには膨大な時間も労力もかかる」という問題が山積で、なおかつ若いパワーが足りず、行政がどうにかしてくれないかな？と期待してそのまま放置されてる場面が多く見られる。

「15年前に里山過疎対策でどうにか

❶「自給自足」の取り組みとして作成した小水力発電機　❷ 消費電力の大部分を発生する太陽光発電　❸ 小水力発電をイノシシ除けの電気柵に活用

しようとみんなで話し合っていたが、中心となっていた方が亡くなってしまい、そのままその話も立ち消えてしまっていました。でもやっぱり、自分たちにできることをやっていこう！と5年前にみんなで再び立ち上がりました」。

「自分たちでちゃんとできていたらこんなにも田畑は荒れていなかったんだ。自分たちだけでどうにもできないんだから、都会の人の力を借りよう」という結論に達し、都市の人が里山に来てくれるような講座を企画し始めた。

メンバーは25名、実動メンバー5名。ほとんどが60代。活動内容も山菜採り、炭焼き、そば打ち、バイオガス、自然農、市民農園、小水力発電と画期的。やはり「足助千年ゼミ」で様々な立場の方と話され、考え方が活性化されているのか？

「都会の人を接待していては自分たちが疲れてしまって続かないから、おもてなしせず全て持参して自分でやってもらうようにしています。街の人は体験して、街では感じにくい〝達成感がある〟と喜んでくれるんです」。

私も都市生活者だったので、この達成感はすごくよくわかる。都会では、自分の暮らしを自分で作っているという達成感はなかなか得られない。

「実際、都会から人が来て、荒れた田畑に手を入れ市民農園など始めたら、8割あった耕作放棄地が、3割に減り、残り7割は手が入れられるようになり、どんどん景色が変わっていきました」。

「そんな腐ったミカンの逆みたいなことが起きるんですね！」

誰かが変わると、みんなの意識が変わり、耕作放棄地と生きた土地の割合が

田植え体験事業の1コマ。かつての里山ではありふれた光景だった

逆転してしまった。家に人が来ると部屋を片付けるように、農村に人が来るようになったら土地そのものが美しくなるのか。今も残る耕作放棄地は土地を離れ都会に出てしまった人のもので、地元に残る人の土地は全て蘇ったそう。

松原さんのおっしゃるように、あの薪ボイラーでも、そのような効果が生まれるのかもしれない。あの一台では燃やせる木の量は限られてはいるが、地元の方が間伐に山に入るようになって、そのぬくもりを都会の人も体感しに来るようになったら、山もそんなに荒らしたままにしていられなくなるかもしれない。

ちょっとだけ無理をしよう

「昔は山の水も飲んで、山にいっぱい木の実もあったから遊びながらよく食べたよ」

「薪を取りに、みんな毎日山に入ってた。この道を馬が通って切った木を運んでいたよ」

「この家（私の住んでる家）の裏も林で、柿やら梅やら何でもあって入って食べてたんや」

そんな、近所のおじいさんやおばあさんの昔話を聞くのが私は好きだ。

みんな遠くを見ながら目を輝かせて話してくれる。大変だったと言いながら何故かみんな楽しそう。その輝きを見て、かつてここはどんなに豊かなところだったんだろう?と、その視線の先に思いを巡らす。山の木の実を食べ、水を飲み、燃料をいただき、山への信頼感は一体どれほどのものだったんだろう?

残念ながら今は山から降りてくる、猿、鹿、猪に悩まされている。畑の作物を食べられるので、柵で囲わなければ農作物は何も作れない。作っても食べられるからと、みんな山の近くの田んぼを耕すのはやめてしまった。

そうして山と人との間にいつの間にか壁ができてしまった。電気の流れる壁が。

鈴木さんにも昔と今とではこの辺りは違うんですか?と聞いてみた。

「そりゃ全然違います。たとえばこの斜面も木ではなく全部草で、その草を刈って田んぼや畑の肥料にしていました。昔は農薬も肥料もなかったしね」

鈴木さんの目の奥に広がる風景も、山

に人の姿があり豊かで楽しそうだった。

　里山の問題は大き過ぎて、どうにもできないような気がするけれど、土地が豊かな頃の記憶が目に焼き付いた鈴木さん世代の方が、諦めずに立ち上がると強いなと感じた。さらに、高野教授のような方の見解が加わり、様々な立場の人と話すことによってどんどん活性化され、そのパワーを後押しすべく行政も加わり、足助町では新たなカタチで里山の再生が進んでいる。

　震災後の対応を見ていても明らかだが、残念ながら行政は期待しているほど、何もしてくれない。足助に来て改めて現状を変えていくのは、やはり自分たちの想いや行動なのだと感じた。

　「自分たちが楽しくやっていれば、みんなにも楽しんでもらえる」と、いきいき話される鈴木さんの姿が印象に残る。

　山にはたくさんのエネルギーが眠っている。身近なエネルギーにフタをしてしまった延長線上に、原発問題もしかり、たくさんの問題があるように思う。だからまずは身近なエネルギーを見直すことから始めようと思う。

「続けるために無理をしない。けどちょっとだけ無理をする。そしたらその分前進できるから」今年で3年目を迎える新盛里山耕流塾。

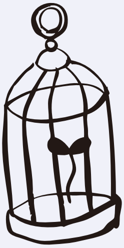
　足助の山が美しくなり、波紋のように美しい里山が各地に蘇ることを願わずにいられない。

里山に新しい可能性を！

豊田市　松原真

●まつばら　まこと＝1974年広島県生まれ。平成9年京都大学文学部卒業。豊田市役所採用後、企画課、東京事務所等の勤務を経て平成22年より足助支所地域振興担当係長。都市と農山村の交流に新たな里山の可能性を夢見る3児のパパ。

●すげの里＝〒444-2505
愛知県豊田市新盛町　中洞67
Tel 0565-69-1622
Fax 0565-69-1633
E-mail: sugenosato@city.toyota.aichi.jp
宿泊も可能



森の記憶

ワダマキ

●わだ　まき＝1977年大阪市生まれ。アクセサリー作家。土に触れて暮らしたくて2009年に夫婦で滋賀県高島市に移住。デザインやアート活動の傍ら、畑で野菜を作る日々。

地域住民、大学、行政が協働して施設を運営
（左から、松原さん、鈴木さん、本田さん、中田さん）

印刷 EXPO vol,1
登校日

❶会場前では飛び出し坊やがお出迎え　❷ペーパーバッグのランドセル、担当したデザイナーがうれしそう　❸❹活版体験では自分で活字を拾いガチャンとプレス。手作りのペーパーバッグとお持ち帰り

　平和紙業(株)といえば「エコ間伐紙」を2003年に発売するなど、早くから環境へ取り組む会社である。去る8月17〜19日、大阪市中央区の同社ペーパーボイスギャラリーにて「印刷EXPO vol.1登校日」が開催された。

　主催は、印刷EXPO実行委員会。

　印刷の現場とクリエイターに活力をと関西の印刷・加工会社とデザイナーがコラボ、「学校」をテーマに作品を多く制作、展示。活版印刷体験やペーパーバッグを作るワークショップも開催し、多くの人を集めた。

アンコール展が決まりました。

印刷EXPO vol.1　「登校日・補習」

10月6日(木)〜10日(月・祝)

場所：Carta Bianca カルタビアンカ

〒542-0081 大阪府大阪市中央区南船場 3-6-14 2F

(ウイングド・ウィール心斎橋 2F)

机の引き出しを開けると作品が

展覧会事務局の奥敦雄さんとプランニング・ディレクションを務めた三原美奈子さんからお話を聞いた。

奥　小規模の印刷会社では技術力や強みがあってもそれをうまくアピールできないのが現状です。その為、価格競争に巻き込まれ値段を自分たちで下げ合う、そんな現状を何とかしたいと思ってました。

三原　『見せ方』を提案するのがデザイナーの仕事です。印刷・加工会社さんがアピールしたい技術力が、デザイナーの柔軟な発想とコラボすることで想像もつかないものが生まれる。それを展覧会で見せたら面白いかなと。

奥　『デザインのひきだし』という雑誌を見て驚いたんですよ。一般的にはよくある印刷加工が、見せ方ひとつで魅力的なものに仕上がる。今回の展示もメンバーのデザイン力と製作技術でとても魅力的な作品を見てもらえる事が出来ました。印刷・加工会社が持つ強みを大きく打ち出すきっかけになったと思います。

三原　今後もデザイナーと印刷・加工会社のみなさんのコミュニケーションが活発になっていくと、もっと面白い表現が出てくると思います。デザイナーを応援してくれる会社さんが増えてほしい。お互いが協力すれば、それだけでも十分差別化になるのではないかと。

奥　印刷ＥＸＰＯの継続が現状を打破するきっかけになって行くことを願います。

奥敦雄
●おく　あつお＝印刷業界に特化したコンサルタント。戦略立案やコスト削減だけでなく、マーケティングの実務サポートなども行う「印刷会社のプロジェクトマネージャー」的存在。印刷会社専門のサポートサイト「印刷会社経営.com」を運営。

三原美奈子
●みはら　みなこ＝京都精華大学美術学部デザイン学科ＶＣＤ専攻卒業。2010年三原美奈子デザイン設立。アーティスト集団・モファ事務局員。イベントマネジメントやワークショップも手がける。（社）日本パッケージデザイン協会会員。

山暮らし子育て日記
東京へ行く!!の巻
作:オノミユキ
オノミユキの住む朽木木地山は、山と川に囲まれているが、
日中は結構暑いよ。
そんなときはみんなで川へGO!
LET'S GO!
子どもたちは冷たい川で流れたり、逆らって泳いだり。
しばらく足を水につけているだけで汗がサーッと引く。
夜、ふとんをかぶらないで寝ると寒いくらいにまで涼しくなる。
そんなエアコン知らずのわが家が
夏、真っ盛りの8月中旬、東京へ!
LET'S GO!
オノミユキのダーリンの実家なのだ。
暑いから覚悟しなさいヨ!
大丈夫かな
しかも この夏は節電、節電…。
セツデンしまーす…
耐えられるかな…
オノミユキ、こうみえても気が小さい。
節電中の姑さんに
エアコンつけて下さい…
なんて、とても頼めない。
ん?
いよいよ東京都内に入ると、
超高層ビルに子どもたちは びーっくり
完全におのぼりさん。
わー!
スカイツリー!!

●オノミユキ（本名 加藤みゆき）＝1974年生まれ。滋賀県志賀町育ち。1997年に朽木村（現高島市）に移住。朽木の自然、行事、人間などを3冊の本にまとめ出版。現在は3人の子どもを子育て中。

愛する風景

わかれ

畑　裕子

イラスト：徳永 拓美

我が家の猫、メイがとうとう三途の川を渡ってしまった。幾度かの危篤を乗り越えてのことだった。

梅雨の中休み、この数カ月外に出ようとしなかったメイが窓辺に近づき、妙に庭に出たがる仕草をする。出してやるとひょこたんひょこたんしながら共に過ごしてきた犬、スズのかたわらに寄って行った。スズは目をこころもち曇らせ、長年の相棒を見つめている。メイが元気な時は常にちょっかいをかけては嫌がられていたスズである。

二匹は、いや、私にとっては二人なのだが、しばらく静かに寄り添っていた。やがてスズがメイの耳を舐めはじめた。猫はされるままじっとしているよだれで濡れたメイの口の周りに犬の舌は移っていった。メイは咀嚼が十分にできなくなり、食べ物や牛乳、よだれでたえず口元を拭かなければならない状態が続いていた。スズはていねいに舐め、メイは我が身を委ねているように見えた。その時、ふと私の脳裏に「メイはスズにわかれを告げに庭に出てきたのかもしれない」という思いが過った。

メイが旅立ったのはそれから一週間後だった。食物を口にしなくなってから三日目、脱脂綿にふくませた水を口に持っていくが吸おうとしない。最期の時がきたのかもしれないと覚悟し、「メイ」と呼びかけると微かに返事をした。それから十数分後、彼女は私の腕の中で永遠の眠りについたのである。

ドイツ在住の娘宅には我が家の猫と同年の猫がいたが、昨年十四歳であの世へ逝った。かの国では猫にも終末医療

というものがあり、食物を口にしなくなってから七日目、動物病院へ連れて行くと「そろそろでしょう」と獣医に宣告され、苦しむことのない選択をしたのだと、娘は涙声で話した。

三月十一日以来、すきっとしない気持ちが続いている。東日本大震災の衝撃はあまりにも大きい。当座は外国に住む知人からもたびたびメールが届き、感謝しながらもその返答に気持ちが滅入っていった。原発避難区域で誰も住まなくなった集落を痩せた牛が四頭、また二頭と走って行く姿がテレビ画面に映し出されていたが、今はもう殺処分されただろう。飼い主の気持ちを思うといたたまれない。

が、心が和むニュースもあった。無住の地に置いて置かざる得なかった地域の犬や猫の飼い主を捜す運動をしている人々の存在である。飼えなくなった元の飼い主が「必ずいつか迎えにくるからね」と愛犬に声をかけていたのが忘れられない。

この間、どれほどたくさんのわかれがあっただろう。我が子を失ったテレビ画面の母の姿が眼から消えない。悲しみと決別し、一歩を踏み出して行こうとする被災地の人々。幼子の死を我が心に納得させるため瓦礫の中に立ち、心を奮い立たせようとしている若い母。身内の遺品を探し、鎮魂の儀式を密かに行う家族。

「亡くなった人の分まで自分たちは生きねばならん」。言葉すくなに語り、復興に向けて立ち上がる男性の声が胸中に響いていく。大阪に住む年配の知人は、東日本大震災の惨状を見て大阪で遭遇した大空襲を甦らせ、身の毛がよだったという。彼女はその空襲で妹を失い、瓦礫の中をさまよっていたという。

「あよなむごいわかれがまこと何万もあったちゅうことを覚えてもろうために生かされとるんじゃ」。井上ひさし作「父と暮らせば」の舞台の一場面である。原爆で命を落とした父のセリフが聞こえてくる。

今、日本で、世界で何かが変わろうとしつつある。変わらなければならないと思う。大震災で命を落とした人々が、生き残った私たちに本当に大切なものとは何かを提示してくれているのである。

畑裕子

●はた ゆうこ＝1948年京都府生まれ。奈良女子大学文学部国文科卒業、京都で国語教師を勤める。その後、滋賀県に転居。1993年・第5回朝日新人文学賞受賞、1994年・第14回地上文学賞受賞、滋賀県文化奨励賞受賞。主な著書「画・変幻」「近江百人一首を歩く」「椰子の家」「近江戦国の女たち」など。日本ペンクラブ会員。

徳永拓美

●とくなが ひろみ＝1949年生まれ。日本画を学び、日春展、京展、新興展、滋賀県展に入選を経て挿絵も描く。「いぶきのやさぶろう」（京都新聞社）、「守山の野鳥ガイドブック」（守山市立教育研究所）、「甲賀のむかし話し」（サンライズ出版）、「イルカをおそった黒い波」（汐文社）など。レイカデイア大学「手作り紙芝居講座」講師。

〈商家の家訓の話　第18回〉

山中兵右衛門家の承継と奉公人

末永 國紀

山中兵右衛門家の慎

近江国蒲生郡日野町大窪（おおくぼ）の山中兵右衛門家を興したのは、貞享2年（1685）生まれの初代兵右衛門である。実家は日野椀の塗物師の家であり、初代は3男3女の末っ子であった。

家業を継いだ商才に乏しい兄は倒産し、先祖伝来の居宅も手放すことになった。この実家倒産の悲運に遭ったことが、初代を行商による失地回復へと向かわせるバネになった。宝永元年（1704）20歳の時、姉の婚家へ家運挽回の胸中を打ち明け、その支援を得ることに成功した初代は、婚家から日野椀2駄を借り受け、東国へ旅立つことによって商いの世界へ飛び込んだのである。

初代は駿河国沼津の旅籠屋（はたごや）伊勢屋善兵衛方を根拠地にして商いに励んだ。善兵衛は初代の人柄を認めて、小田原藩領であった御厨郷（みくりやごう）（現・御殿場市）での営業を勧めた。当時の御厨郷は、箱根関所の北方にあたり、沼津・三嶋から甲斐の郡内へ通じる岐路に位置する宿場町であった。

以来14年間にわたって、往路では日野椀を売り、復路では御厨郷の産物を仕入れて売る持下り商いに従事した。仕入れ金を借りて商売を始めた初代は、経費を可能な限り節約する必要があった。ある時は茶店の代わりに辻の堂を利用し、喉の渇きを谷水で癒したと伝えられている。また旅費に窮した場合は、昼食の代わりに路傍の畑の大根を所望して空腹を満たしたこともあったという。

努力は実って、享保3年（1718）に御厨郷御殿場村に日野屋と称する初めての店舗を開くことができた。取扱い商品は、食料品から小間物や日用品であり、万屋（よろずや）的商法によって、わずかな利益を積み重ねていった。初代は寛保年間（1741～43）に人手に渡った居宅を買い戻し、延享2年（1745）に家督を長男の二代目兵右衛門に譲って隠居した。没年は安永3年（1774）、享年90。

二代目兵右衛門は、享保10年（1725）に生まれた。御殿場店は隆盛となり、近隣の村々と卸・小売りの方法を巡って争いを惹き起こすほどに成長し、明和7年（1770）には沼津店を新設

した。安永6年（1777）に三代目に家督を譲って隠居し、文化2年（1805）に81歳で没した二代目は、著名な家訓を制定した。78歳となった享和2年（1802）に作られた、10カ条からなる「慎（つつしみ）」である。

この家訓の特徴は、半分の5カ条が商いの手法について説かれていることである。不実の商いを慎むことを求めた5カ条の内容は以下の通りである。

・店の仕入品は、よく吟味し、確実な品質の品を売買すること。不正な品や粗末な商品を取り扱ってはならない。また一挙に高利を望んではならない。
・得意先に対しては、誠心誠意をもって確実な商品を届けること
・子供などは小さな得意先だからこそ、却ってこれを大事に扱うこと
・外見の見てくればかりを飾るような派手な商いは不要であり、堅実な商いを心掛けること
・市価の変動を見越して実物の受け渡しをしないで決済したり、思惑取引したりなどは、全く無用な仕法である

二代目の長男の三代目は、宝暦8年（1758）に出生した。家督相続後は積極経営を進め、御殿場の近傍に2店の酒造店を開いた。また、御殿場出店100周年を記念して、小田原藩へ50両上納して2人扶持を与えられた。50歳で中風を発病したが、後継者の息子が幼かったため、当主の地位に座り続けざるを得なかった。没年は文政8年（1825）、享年68。

これまで順調であった山中家の承継に問題が生じるのは四代目からである。四代目は文化2年（1805）に生まれ、3人の兄が夭折したため、21歳で家督を相続した。商家の当主としての十分な訓練と経験を積むことなく、1万4000両余の純資産を相続することになった四代目は家業に身を入れなかった。相続後間もない文政12年に、店支配人を始めとする奉公人一同から厳しい弾劾を含む「恐れながら申し上げ奉り候」という要望書を受け取る羽目になった。

爪印を押した要望書の中身は、当主が家業に一向に精励しないので案じていたところ、さらに家の利害にかかわるような不埒の身持ちが明らかとなった、この上は、周囲の忠告を聴き入れて改心してもらうならば店一同安心するが、聞き入れられなければ奉公を続けられないので、奉公人全員退店の覚悟である、よって要望を受け入れてもらいたいというものであった。

四代目は全面的に要望を受け入れ、誓約書を作成した。しかし四代目は当主の自覚に乏しい所業を繰り返した。以後、山中家は幼弱な当主が続き、家督相続は三代にわたって齟齬（そご）をきたした。山中家が明治中期に立ち直るまで家業を維持できたのは、出店収益の25%を奉公人に配分する主法制度の導入などによる、主家と奉公人の間柄が所有と経営の分離関係にあったからである。

近江商人に学べ

末永國紀

●すえなが くにとし＝1943年生まれ。同志社大学経済学部教授。経済学博士。（財）近江商人郷土館館長。
著書／『近代近江商人経営史論』（有斐閣）、『近江商人』（中公新書）、『近江商人学入門』（サンライズ出版）、『日系カナダ移民の社会史』（ミネルヴァ書房）、『近江商人 三方よし経営に学ぶ』（ミネルヴァ書房）

里のお話

アザミの山

三山　元暎

さし絵:中川 善雄

日差しの勢いは、日一日と秋めいてきた。そんな一日、伊吹山を歩いた。夏のお花畑を鮮やかに彩ってきたシモツケソウやクガイソウ、メタカラコウなどの花々は、すっかり終わりを告げていた。代わって、盆前は蕾だったコイブキアザミが、淡い紅紫の花を密集させて咲かせている。

アザミは世界に多くあり、日本では百種以上あるという。日本全国、海辺から高山まで、普通に見られるキク科の多年草である。しかも、春から夏、秋いつでも見かけることができる。葉は深い切れ込みのあるものが多く、刺があって、とにかく触れれば痛い草の代表だ。

雲散って空の深さや夏薊
（作間　正雄）

伊吹山は、アザミの山といわれるほどこの仲間が多い。特産種であるコイブキアザミやイブキアザミ、ミヤマコアザミは、山頂付近のごつごつとした石灰岩の岩場に群生している。コイブキアザミが小さな頭花をいっぱいつけるに比べ、イブキアザミは花茎が長く花のつき方もまばらだ。

イブキアザミに長旅好きの蝶、アサギマダラがふわふわと飛んできて吸蜜しはじめた。この蝶は、ヒヨドリバナによく集まり吸蜜することで知られている。たまにはB級グルメを味わってみたい、そんなことでの飛来かもしれない。

ミヤマコアザミは各地の山野に、どこでも見られるノアザミの変種で、ノアザミに比べて丈が低く、葉に硬い刺が多い。茎や葉には白い毛が目立ち、花はねばつく。花期はコイブキアザミより早く七月頃から咲いている。

石灰岩地帯を好み、厳しい冬に耐え、伊吹山の特殊な気象条件に適応して、みごとに生き抜くたくましさを身に付けたこれらの特産種のアザミたち。その控え目な優しさ、美しさ、他を寄せ付けない鋭い刺をもった侍魂漂う、そのなかに、我こそ、伊吹山を守護するにふさわしい花だという自覚と風格をみた。

三山元暎

●みやま　もとあき＝1940年滋賀県坂田郡山東町（現・米原市）生まれ。長浜市の理事・経済部長を経て1995年8月から2005年2月まで山東町長。同月14日米原市誕生にともない退任。真宗大谷派真勝寺前住職。

●なかがわ　よしお＝1936年生まれ。滋賀県展、長浜市展、伊吹を描く絵画展など入賞、入選歴多数あり。税理士。

本の紹介

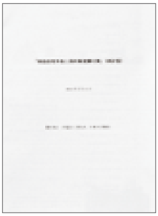
最近入手した、気になる本・CD・DVDをご紹介します。

BOOKS

月3万円ビジネス～非電化・ローカル化・分かち合いで愉しく稼ぐ方法

- 著者／藤村靖之
- 発行／晶文社
- 価格／1500円+税
- 内容／これからは地域循環型！小さなビジネスが世の中を大きく変える。あなたの未来が垣間見れる。必読書。

福島原発事故と放射線被爆対策（改訂版）



- 著者／藤村靖之
- 発行／非電化工房
- 価格／1000円
- 内容／原発事故で何が起こるか？19の項目で放射能汚染について学ぶ。連続講義のテキスト。

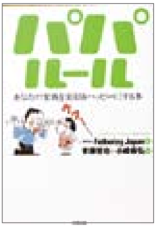
近江商人三方よし経営に学ぶ

- 著者／末永國紀
- 発行／ミネルヴァ書房
- 価格／2800円+税
- 内容／いまこそ、商売の原点を見つめ直す。日本的経営を生んだ先人たちの苦闘と社会的責任（CSR）とは。商売のやり方、生き方は？三方よしを今一度。

湖北町の伝統食・地産食増補版

- 編集・発行／湖北町食事文化研究会・肥田文子
- 価格／1500円
- 申込／〒529-0313長浜市湖北町伊部585
- ☎&fax（0749）78-0475
- 販売／道の駅湖北みずどりステーション、JR河毛駅売店、サンライズ出版
- 内容／忘れぬうちに伝えたい湖北町の伝統料理105点を紹介。

パパルール



- 編集／NPO法人Fathering Japan
- 著者／安藤哲也+小崎恭弘
- 発行／合同出版
- 価格／1400円+税
- 内容／あなたの家族を10倍ハッピーにする本。合い言葉は「笑っている父親が社会を変える！」

わら一本の革命

- 著者／福岡正信
- 発行／春秋社
- 価格／1200円+税
- 内容／自然農法。耕さず、草もとらず、肥料もやらず、しかも多収穫。現代の老子が語る無の哲学と実践。

足のむくまま近江再発見

- スケッチ／國松い厳太郎
- 文／北脇八千代
- 発行／新評論
- 内容／シリーズ近江文庫。文化の香りと近江人の息吹を生き生きと伝える魅惑の画文集。

嘉田知事と語る「滋賀の未来戦略と人材育成・近江環人」

北村 有理

滋賀県総務部自治振興課　振興・調整担当

自然のめぐみや文化のめぐみをめぐりあわせてあたらしい文化をつくりだすのは人というめぐみです。まちを元気に！湖国滋賀の地域活性化の活動を展開する職能人「コミュニテイアーキテクト（近江環人）」がNPO法人をつくりました。近江環人の深くて広いネットワークを活用して、湖国滋賀にあたらしい文化を人のめぐみで生み出します。まずは嘉田知事をお招きして、第１回総会を記念したシンポジューム「嘉田知事と語る　滋賀県の未来戦略と人財育成」を開催しました。会員でもあり、滋賀県総務部自治振興課振興・調整担当の北村有理さんにレポートをお願いしました。

■ 日時／8月6日
■ 場所／滋賀県立大学
■ 参加／50名
■ 主催／特定非営利活動法人コミュニテイ・アーキテクトネットワーク（略称・環人ネット）

「不易の対応」と「有事の対応」

滋賀県立大学で行われた特定非営利活動法人コミュニティ・アーキテクトネットワーク（環人ネット）の総会開催記念フォーラム「嘉田知事と語る　滋賀の未来戦略と人材育成・近江環人」に出席。環人ネット理事長の辻村琴美さん、滋賀県立大学の鵜飼修准教授との鼎談を行いました。東日本大震災を受けて、平常時の「町づくり」のコミュニティ・アーキテクトから、非常時の人のつながりの重要性について議論する段階になったこと、お伝えいたしました。特に、滋賀県内でも、伝統的地域共同体が強いところは、河川水害など、災害対応を求められていたところとかなり重なります。「不易の対応」と「有事の対応」をつなぐ必要性を提起させてもらいました。

滋賀県知事　嘉田由紀子（かだ便り８月６日より）

地域での支え合い…

倒壊した家屋258,297棟（全壊、半壊、全半焼）、死者15,731名、行方不明者4,532名（平成23年8月現在）の未曾有の被害をもたらした東日本大震災は、豊かな暮らしの中で平和な日々を送る私たちに、人と人のつながりや地域のつながりの大切さを改めて教えてくれました。

津波で全てが流され、命からがら助かった人、放射能汚染により住み慣れた我が家から、強制的に離れなければならなかった人、汚染の影響で処分しなければならなかった家畜や農産物の数々…テレビから流れる被災地の筆舌に尽くしがたい様子を、ただただ見ていることしかできない自分の無力さを、痛い程思い知らされました。しかし、画面の中には被災した当事者である地域の方々が、倒壊した家屋の処理や土砂の撤去、お隣同士の安否確認を率先して行なっている、自助、共助の姿があり、地域コミュニティの本来の姿があるように思えてなりませんでした。

住み心地の良い滋賀県へ

そんな中、平成23年8月6日（土）、特定非営利活動法人コミュニティ・アーキテクトネットワーク（NPO法人環人ネット）総会開催記念フォーラム「嘉田知事と語る　滋賀の未来戦略と人材育成・近江環人」にて、嘉田由紀子滋賀県知事、NPO法人環人ネット　辻村琴美理事長、そして滋賀県立大学　鵜飼修准教授の3氏による鼎談が行われ、3月に発生した東日本大震災について、それぞれの思いが語られました。

バブル景気の崩壊から、経済的にも苦しい状況の続く日本が直面した今回の震災では、何十年もかけて積み上げてきた行政機能の無力さを露呈することになりました。地震や津波などの自然災害が多い日本では、昔から災害に備え、地域ごとに、人と人とのつながりを必要とするコミュニティが築かれていました。今、地域では「自分たちのまちは自分たちの手で守っていきましょう」

熱心に語り合う

を合言葉に、まちの再生に力が注がれています。平常時のまちづくり活動を災害時に実践するためには、「人とのつながり」が重要であり、鼎談の中で、NPO法人環人ネットや近江環人の人材とネットワークの必要性が語られました。

　また、住み心地日本一と感じられる滋賀県を目指して「不安なく楽しく暮らせる滋賀」「人と自然がつながる美しい滋賀」「たくましく活力に満ちた滋賀」そして「安全・安心な滋賀」を創るためのディスカッションの場である未来戦略サロンへの積極的な参加も呼びかけられました。たくましい地域づくりに取り組むとともに、今後の滋賀県のまちづくりを担う人材育成を継続して行っていこうとの熱い思いを感じることができました。

笑顔・元気・つながり→ふるさとの香り

守山市で生まれ、守山市役所に奉職10年、これまで多くの方々との出会いがあり、地域の方々とふれあい、NPO団体などのお力をお借りし、地域づくり、まちづくりの業務に携わってきました。

　私が一番大切にしている宝物は、地域との、そして人と人との「つながり」です。市内を歩けば「最近は調子どうや？」と家族のように接してくださる地域の方々の温かさです。今日までご縁をいただいた多くの方々の「笑顔」に心地よいふるさとの香りを感じることができます。

　多くの方とお話をすることで、「元気」をいただいている私は、これからも地域の方々との交流を大切にし、たくさんの方から広くご意見をお聞きしながら、地域づくり、地域活性化につなげていくことを第一の目標として「住み心地日本一の滋賀」に向かって邁進していきます。

　現在、滋賀県庁にて県内の地域再生、地域活性化にかかる人材育成事業に携わっています。県内各市町のまちづくり事業を学び、ご活躍される方の熱意と、地域に対する温かい想いと、心から滋賀県を愛する熱い想いにふれています。

笑顔　北村有理

●きたむら　ゆり＝滋賀県守山市出身。滋賀県総務部自治振興課　振興・調整担当。平成14年度に守山市役所入庁。教育委員会事務局教委総務課、市民福祉部市民課、環境生活部環境政策課を経て、平成23年4月から市町職員長期実地研修生として滋賀県庁で地域活性化事業（まちづくり事業）を担当。

地域創造事業「いきいき地域ウオーク」
彦根袋町　遊里・貸座敷探訪ウオーク

環人会ツアーが、湖東地域創造事業の助成を受けて「いきいき地域ウオーク」に生まれ変わりました。第１回は、地方遊里について坂下さんに発表いただき、遊郭の思い出を料亭小島の女将さんにお聞きします。貸座敷の建築物も必見です。

開催日　2011年11月26日(土)　※雨天決行

プログラム

9:50●JR彦根駅前にて受付開始
10:00●JR彦根駅に集合
徒歩にて彦根袋町へ移動
10:30●袋町及び花しょうぶ商店街の周辺散策
11:15●**研究ノート発表　「地方遊里について—滋賀県を事例として—」**仮称
（発表者：滋賀県立大学大学院博士後期課程 坂下弘徳）
貸座敷：料亭「小島」にて
12:00●**貸座敷：料亭「小島」女将より講演**
（食事をしながら、アルコールの注文可）
「彦根袋町遊廓の思い出」
講演は30分間
食事後は会場見学
13:30●別の貸座敷等見学
（案内：滋賀県立大学大学院博士後期課程　坂下弘徳）
14:30●徒歩移動にて平田町にある地場産業「ファンデーション」製造会社を見学（予定）
15:30●近江鉄道「彦根口駅」解散

当日は歩きやすい服装・及び雨具の用意をお願い致します。
昼食時にアルコールを飲まれる場合は自動車での参加はしないで下さい。

参加費　一般　3,000円　NPO法人環人ネット会員　2,500円
（料亭「小島」での昼食代込み）

お申し込み・お問い合わせ先
NPO法人　環人ネット 事務局
〒521-1101　滋賀県彦根市石寺町1263番地
E-Mail： info@kanjin.net
URL： http://kanjin.shiga-saku.net/

［主催］NPO法人環人ネット

第2回 ヒナツクエスト
2011年12月23日(金祝)
1st Stage Start

ヴォーリズ氏の設計で知られる、旧日夏役場は新たな変身を遂げようとしています。風格ある建物を残したい、この思いが若者を動かしました。お洒落なカフェにはお客さんが絶えません。日夏を歩いてみませんか？

くつきの森　山のめぐみフォーラム2011
～ 間伐材が朽ちてゆく　山を守るのはだれか ～

山里に住む、林家（リンカ山主）では、森林が「めぐみ」よりも重荷になっています。　しかし「山のめぐみ」を得るためには、私たち小さな林家ひとりひとりがしっかり山に目を向け、山へのかかわりを広げていかなければならないと思います。「フォーラム」では参加者のみなさんとともに、森林の今の姿の理解を深め、秋の夜長を朽木の里山料理とフォークミュージックで楽しんでいただきます。

開 催 日　2011年9月23日（金）13：00～20：00

開催場所　滋賀県高島市　くつきの森　メイン会場；やまね館

プログラム

13:00● **開会　挨拶　理事長**

13:10● **基調講演**
「林業をめぐる最近の動きと地域林業の展望」
林材ジャーナリスト　赤堀 楠雄さん

14:15● **先進取組事例の報告**
「小規模林家が変われば山も変わる」
NPO法人 土佐の森救援隊　事務局長
中嶋 建造さん

15:00● **地元での取組の報告**
高島市森林組合 総務課長 岩淵 篤さん

15:20● **パネルディスカッション**
〔パネラー〕
林材ジャーナリスト 赤堀 楠雄さん、
NPO法人土佐の森救援隊　事務局長
中嶋 建造さん
高島市森林組合 総務課長 岩淵 篤さん
〔司会〕：森林文化協会　月刊「グリーンパワー」編集長 海老沢 秀夫

16:30● Free　Time　自由休憩時間

17:30● **夕食会　地元くつきの里山料理**
地元くつきの里山料理をバイキング形式で

18:30● **音楽会**　フォークミュージックで秋の夜長を楽しむ
グループ：シェリーズ（４人組）

参 加 費　夕食会&音楽会のみ2,000円

定　　員　100名（要予約）

申し込み締め切り　9月15日（木）

お申し込み方法　申込用紙にご記入の上、郵便、FAX、メールのいずれかでお申し込み下さい。

お申し込み・お問い合わせ先
NPO法人　麻生里山センター
〒520-1451　滋賀県高島市朽木麻生443番地
TEL.0740-38-8099　　FAX.0740-38-8012
Ｅメール　asosatoyama@zb.ztv.ne.jp
URL　「森林公園　くつきの森」で検索

［主催］ＮＰＯ法人 麻生里山センター
［協賛］M・O・H通信　高島森林体験学校

よばれやんせ湖北一地産地消
～生産者・消費者交流会～

雄大な北湖を臨む朝日漁業会館にて、産品の試食とともに作り手のお話を聞き、日ごろの食・地産地消を見つめる交流会を開催いたします。もりだくさんの1日の終わりには、尾上漁港から眺める琵琶湖の夕暮れを堪能してください。

開催日 2011年11月19日(土)11:00（10:30会場）～16:00まで

開催場所 朝日漁業会館（長浜市湖北町尾上144-14）

プログラム

10:30 開場（受付開始）
11:00 開会
11:15 **トーク1：淡海の宝石！ビワマスについてのお話**
川瀬 利弥さん（㈱びわ鮎センター）・
松岡 正富さん（尾上朝日漁協）
12:00 休憩
12:15 **作り手との交流会**
・作り手のお話を聞きながら、湖北の幸をいただきます。
・びわサーモン（養殖ビワマス）と天然のビワマスの食べ比べを予定しています。
※漁獲の状況等により変更する場合があります。
・その他のメニューは、湖北の新米、お母さん手作りのお漬物、あったかお蕎麦、デザートに米粉のシフォンケーキ、伊吹山の薬草茶など…少しずついろいろな"ええもん"を準備中！
14:15 休憩
14:35 **トーク2：食から地域を盛り上げましょう！**
成田 賀寿代さん（こだわり滋賀ネットワーク）他
15:25 閉会

交通 駐車場あり、自家用車でおこしいただけます。
公共交通機関ご利用者の方は、JR北陸本線「河毛」駅から送迎あり。
（申込時にお知らせください）

参加費 2,000円
※配膳に手を貸していただける方、若干名を募集いたします。（お礼は参加費から1,000円バックいたします）

定員 60名（事前申込制）

申し込み締め切り 11月15日（火）

お申し込み・お問い合わせ先
NPO法人木野環境（担当：北井）
〒600-8085　京都市下京区葛籠屋町515-1
TEL:075-708-8061　FAX:075-708-8062　mail:oubo@kino-eco.or.jp

［主催］よばれやんせ湖北実行委員会
株式会社ロハス余呉、長浜み～な編集室、NPO法人木野環境、M・O・H通信
［協力］長浜市地産地消推進協議会（長浜市農政課）、NPO法人環人ネット

文化ボランテイア人材育成事業
地域文化コーディネーター&文化ボランテイアコーディネーター養成講座
コーデイネーション力を高めよう！

〈第１日目〉

●日時／10月9日（日）10：00〜16：00
●会場／しが県民芸術創造館練習室１
●内容／ファシリテーションの講座およびワークショップ

〈第２日目〉

●日時／10月10日（祝月）10：00〜16：30
●会場／しが県民芸術創造館練習室１
● 内容／講義

〈第３日目〉

●日時／10月30日（日）10：30直前研修、17：00〜検定試験
●会場／滋賀県立文化産業交流会館　第一会議室
●内容／基礎、ボランテイアコーデイネーション力３級検定試験
●主催／滋賀県、（財）滋賀県文化振興事業団「しが県民芸術創造館」
●問合せ／〒525-0059 滋賀県草津市野路6丁目15−11
Tel.077-564-5815　Fax.077-564-5851
E-mail：souzou@shiga-bunshin.or.jp
http：//www.shiga-bunshin.or.jp/souzoukan

彦根市制75周年記念事業
「ひこにゃん田んぼアート」
稲刈り体験参加者募集！

NPO法人環人ネットにおきましても思い出深い事業となりました「ひこにゃん田んぼアート」が遂にクライマックス。

ひこにゃんを「収穫」してくださる方、大募集中です！もちろん彦根市外の方も大いに歓迎します！

参加ご希望の方は是非下記まで御連絡ください。お待ちしております！

●日時／平成23年10月1日（土）
10：00〜15：00（予定）（受付開始9：30〜）
※雨天の場合は、10月2日（日）
●場所／彦根市石寺町の田んぼ（ひこにゃん田んぼアートの地点）
●対象／小学生以上（小学生保護者同伴）
●定員／300人（先着順）
※参加者には、後日、案内文を送付いたします。
●参加費／無料
●保険／参加者を対象として、簡易保険に加入します。
●持ち物／稲刈りができる服装、のこぎり鎌、手袋、タオル、長靴、飲料水等服
※雨天の場合は、雨具を用意してください。（雨天中止）
●申込方法／下記の環人ネットのメールアドレスまで御連絡下さい。
その際には下記の項目を忘れないで記入してくださいね！
1. 郵便番号・住所
2. 電話番号
3. 参加者全員の氏名・ふりがな、年齢
●問合せ先／NPO法人環人ネット事務局
E-mai：info@kanjin.net
〒522-8501　滋賀県彦根市元町４番２号
彦根市役所 産業部 農林水産課
Tel.0749-30-6118（直通）Fax.0749-24-9676
市制75周年記念事業「ひこにゃん田んぼアート」稲刈り体験の参加者募集
http：www.city.hikone.shiga.jp
概要説明

未来への道しるべ
〜おうみ未来塾・成果発表会〜

●日時／11月12日13：00〜17：00
●場所／滋賀県民センターピアザ淡海
　大津市におの浜1−1−２０
●内容／「地域プロデユーサー」をめざす塾生が成果を発表します
●主催／淡海ネットワークセンター
Tel.077-524-8440　Fax.077-524-8442

田舎暮らしフェスタ2011 清らかな水でつながる湖北

●日時／10月23日（日）10:00～16:00
●会場／長浜市立杉野小中学校（滋賀県長浜市木之本町杉野）
●入場／無料、自由、体験プログラム有り（要申込・有料）
●主催／湖北田舎暮らしフェスタ実行委員会

水源の里まいばら農林水産まつり ～水の恵みの感謝祭～

●日時／10月30日（日）10：00～15:00
●会場／伊吹薬草の里文化センター（ジョイいぶき）
●入場／無料、地域体験は要予約、有料
●内容／ブース展示、丸太切り大会、農産物競り売り、講演・藤田志穂氏（ノギャルプロジェクト発起人）、抽選会
●問合せ／米原市役所　水源の里振興室
Tel.0749-58-1121
http://www.city.maibara.lg.jp/

奥伊吹フォトコンテスト

●内容／作品募集
●テーマ／「奥伊吹:山里の四季(春～夏)」残してお期待、伝えていきたい奥伊吹地方の風景をお寄せください
●募集／9月1日～30日
●問合せ／米原市役所伊吹市民自治センター　Tel.0749-58-1121
e-mail:ibuki-shinko@city.maibara.lg.jp
●応　募／プリント（A4サイズまたは四つ切り）を東草野懇話会ハウス（〒521-0303　米原市甲賀253−1まで郵送
●主　催／東草野まちづくり懇話会
http://higashikusano.com/

田舎暮らし体験inいびがわ

●どっぷり田舎暮し体験（長期滞在型1　週間プラン）
●プチ田舎暮らし体験（短期滞在型Ⅰ、　地域就農体験コース、１泊２日）
●プチ田舎暮らし体験（短期滞在型Ⅱ、自然とふれあう体験・１泊２日）
●問合せ・申込／岐阜県揖斐川町移住・定住促進地域協議会
〒501-0692 揖斐川町三輪133 揖斐川町役場企業誘致課内
Tel.0585-22-2111（内線181）　Fax.0585-22-0093

風と土の交藝in琵琶湖高島

●日時／12月2日（金）～4日（日）
●出店者募集／高島市内の空き民家や交流施設を会場に工芸作品やアート等の展示をする作家、学生、グループを募集
●締切／一次9月10日、二次10月30日
●主催／結びめ
●協力／風と土の交藝プロジェクトチーム
●問合せ／〒521-1121　高島市勝野1108−3 結びめ
Tel.090-5014-1600　Fax.0740-36-1661
mail:info@musubime.tv

『サポートスタッフ募集』
・説明会／9月18日、10月16日
・会場／結びめ

『シンポジウム』
・日時／12月3日
・講師／アレックス・カー氏、
　北川フラム氏

神仏います近江展

近江は仏教美術、神道美術の宝庫。この秋、近江の宗教美術およそ300点が会し、湖国で最大規模の展覧会が始まる！
▶大津（大津市歴史博物館）
11月23日まで
▶瀬田（滋賀県近代美術館）
11月20日まで
信楽（MIHO MUSEUM）12月11日まで
●入館料／有り
●主　催／神仏います近江展実行委員会
（事務局：MIHO MUSEUM内）

「循環型社会を目指す～M·O·H通信～」の発行に当たって

代表　森 建司

20世紀型社会は経済至上主義の時代であった。科学技術の進歩とそれに伴う工業や流通の発展は、世界的なスケールで人々に物による恩恵をもたらしたが、同時にバランスのとれた自然との共生社会を破壊した。経済至上主義とは物の豊かさを最高の幸せとして捉え、その対極にあるものの価値をほとんど消し去ろうとするものである。人々の価値観を情報操作で画一化して、特定のものに集中させせようとするマーケット戦略は個人の人生観、社会観にまで侵入し、その独自性、不可侵性まで奪って行った。このことによって人々は哲学的な意味の自己をなくしてしまった。

今こそ新しい時代として循環型社会を作ろうとしているわれわれは、自己を証明する、こころとか思いを取り戻さなければならない。死生観や人生観、先祖や子孫、生涯をかける志、自己を自己らしく生き抜くための人生哲学など。そしてそれは自然との共生社会を目指すものであり、人としての真の生き様を問うものであらねばならない。

この実現のために
「循環型社会を目指す～M·O·H通信～」を発行する。

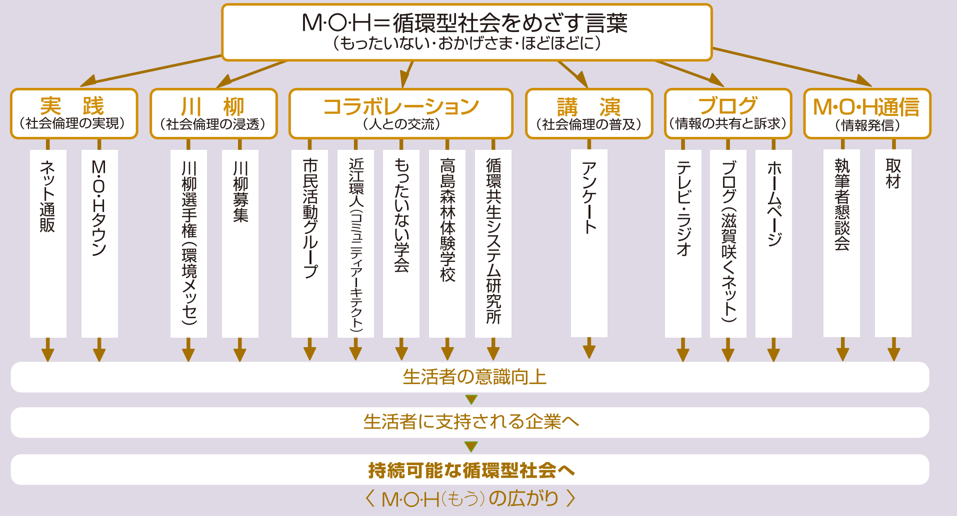
《 M·O·H通信概要 》

■目的
(1) 循環型社会構築に向けた意識改革
(2) 浪費型社会通念の脱却
(3) 人生哲学を学ぶ

■事業
(1) 通信の発行及び出版
(2) 講演会、勉強会、シンポジウムなどイベントの開催

■事務局
〒526-0111
滋賀県長浜市
川道町759−3
循環型社会システム研究所
TEL.0749-72-5277
FAX.0749-72-8681
e-mail:tsujimura@shingoshu.co.jp
代表:森 建司
担当:つじむら ことみ

[M·O·Hコンセプトシート]



読者の声

★我、今だ木鶏にあらず
京都新聞滋賀本社代表 上野 孝司

★私も目ざすところは同様ですが、日くれて道遠しといったところです。
宮崎市 高見 晋一

★しいたけブラザーズのしいたけを取り寄せたいです。
佐倉市 平田 和子

★「日本で一番大切にしたい会社」受賞、おめでとうございます。お話し聞かせてください。
野洲市 田中 布佐恵

★暑いので図書館で嘉田さんの記事を読みました。ちゃんと考えてはるんや。想定外を想定する政治家の世界をのぞいたよう。しいたけブラザーズに村上瞳さんの写真を見てびっくり。
守山市東門院アート市 八段 一恵

★新しいM・O・H通信ありがとうございます。
森山 勝心

★みんなの関心事につながる記事が多くて感心してます。
びわこみみの里 中村 正

★嘉田知事さんの「正常な安全感覚とは?」は秀逸です。
鎌倉 石井 吉徳

★地域の声に関連する姿勢がパワーアップ。写真もクオリティが高すぎ。
もとこ しま

★消費者と生産者交流会に参加して生産者を訪問したい。
京都市 長宗 清司

★お久しぶりです。楽しく拝読しております。メンバーにも配布します
大津市 三浦 みか

★ダンボールコンポストを発展普及させるため、県立大学、県技術センター、地元企業さんと事業化を目指したい
米原市 庄司 安男

★おおつ市民環境塾の開催にあたり、M・O・H通信32号をお送りいただきありがとうございます。おかげさまをもちまして山崎隆先生の講演も、多くの参加者を魅了し皆様に喜んでいただけました。
大津環境フォーラム 江南 和幸

★会報「ひつじぐさ」を発行しています。高島市エコライフ推進協議会でお世話になりました。
環境を守るいまづの会 深田 源蔵

★次号も楽しみにしています
長浜市 池野 淳子

★オススメのフリーペーパー。滋賀発地域環境情報満載の冊子。独自取材にもとづく記事は圧巻です。辻村耕司さんの写真もダイナミック(ツイッターより)
京都市 加藤 和子

M・O・Hせんりゅう

♪M・O・H通信 ひとりで読むには もったいない
高槻市 西浦 外輝男

♪上り坂、下り坂、ま−さか
彦根市 西田 寿男

《次号予定》

2011年12月発行予定

■特集:『温故知新』人・くらし・宝
●対 談/前大阪大学総長 鷲田清一+
●対 談/「馬酔木展の秘密」長浜・岡田辰男+三山元暎
●取材/美の滋賀(仏教美術+アールブリュット+西洋美術)
●取 材/滋賀ブランド
●寄 稿/「弁天様をお迎えして」沓水節夫
●寄 稿/「天性の芸術家に魅せられて」藤本 えりか
●レポート/よばれやんせ湖北 ほか
●連 載/通常通り
※ 敬称略、予告なく変更いたします

編集後記

台風 12 号で被害にあわれた方にお見舞い申し上げます。

特集「未来につなぐ」でっかいテーマだけに、自問自答と自己嫌悪の毎日でした。前回の特集に続き、次代につなぐものを探りました。未来を語りたい人が多いのにはびっくりしました。篤い想いとたくさんのテーマをもっておられます。皆さんの声を拾いきれませんでした。力不足です。今です、今の皆さんの想いを聞かせて欲しい。それが、未来の架け橋と具体策になるのでは?

揺るがない信念を、もちたいなぁ。ゆらゆらしている私のハートは、とっても軟弱です。

ホルスタイン ことみ

《M·O·H通信》受付中！

　あなたも「M·O·H通信」を読んでみませんか。特典として、M·O·H通信、講演会のご案内をいたします。あなたの活動やこの通信について の、ご意見もお聞かせください。
　お名前、年齢、郵便番号、住所、電話番号、fax（あれば）、e-mailアドレス（あれば）、心に残った一言をご記入の上、お申し込みください。通信をお送りします。申込書をfax、郵送、mailでお送りください。

《M·O·H通信》申込書

フリガナ		年齢	希望冊数
お名前			
住　所	〒		

電　話	FAX	メールアドレス

あなたの心に残った一言、MOH川柳をお書きください。

※記入いただいた内容については、目的以外のことに使用または転用はいたしません。

キリトリ線

M·O·H通信　Vol.33（通巻34号）2011年9月20日発行　発行部数6,000部

●編集・発行/新江州（株）
循環型社会システム研究所
M·O·H通信編集局

代　　表　森 建司
編 集 長　つじむら ことみ
校正協力　稲垣 重雄
取　　材　荒木 美晴
デザイン　伊達デザイン室
写　　真　辻村写真事務所
印　　刷　プランセル
ホームページ　プランセル
ブ ロ グ　滋賀·咲くブログ

●執筆者懇談会
内藤 正明　畑 裕子
海東 英和　堤 幸一
山田 朝夫　進 ひろこ
下西 康嗣　中村 誠
末永 國紀　笹山 千怜
花田 眞理子　結城 美枝子
弘中 史子　松崎 和弘
今関 信子　井上 昌幸
山崎 隆　辻村 耕司
三山 元暎　佐々木 洋一
加藤 みゆき　徳永 拓美
清水 安治　山口 美知子
檀上 俊雄　岡部 達平
森 孝之　豊田 一美
仁連 孝昭　（順不同·敬称略）

●ご協力
滋賀県
琵琶湖環境科学研究センター
循環共生社会S研究所
高島森林体験学校
麻生里山センター
NPO法人環人ネット
近江環人 地域再生学座
もったいない学会
野洲生活学校
EEネット
中小企業家同友会
（順不同）

●支援
新江州（株）
〒526-0111 滋賀県長浜市川道町759-3
TEL.0749-72-5277　FAX.0749-72-8681
★ブログ　滋賀・咲くブログ★
http://moh.shiga-saku.net/
★ホームページ★
http://www.mohmoh.jp/

MOH図書館　検索

※記事中での写真・本文につきましては、無断転載を禁じます。